

小樽高商軍教事件

荻野 富士夫

はじめに

一 小樽高商軍教事件の前史

- 1 「軍事教練」導入へ
- 2 鈴木平一郎少佐の配属
- 3 小樽高商社会科学研究会の創設
- 4 小樽社会運動の上げ潮

二 小樽高商軍教事件の惹起

- 1 野外演習の実施
- 2 想定への抗議
- 3 「少壮教授」の動静

三 小樽高商軍教事件の展開

- 1 高商社会科学研究会の活動
- 2 高商学生の反応
- 3 高商当局の抑圧措置
- 4 文部省・陸軍省の対応
- 5 軍教事件の全国的波及

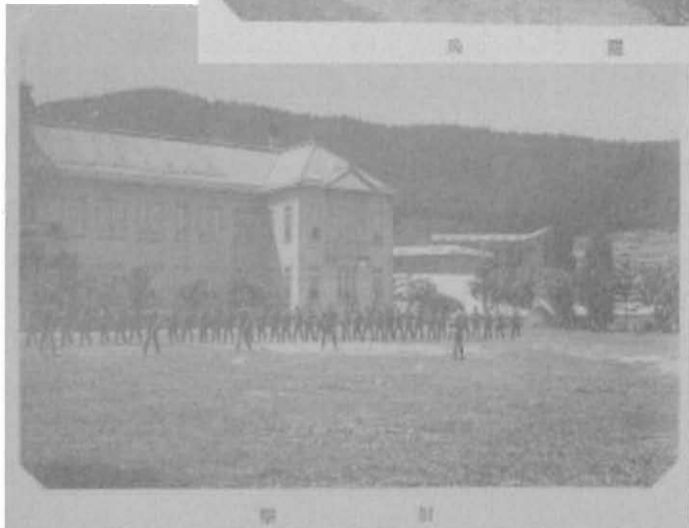
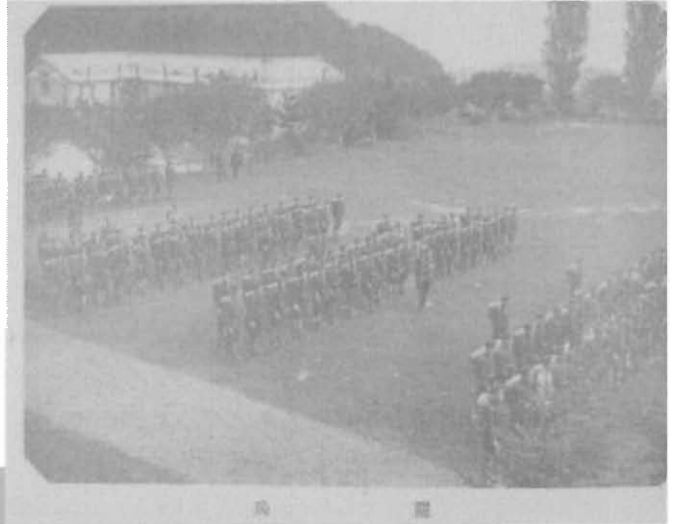
四 その後の「軍事教練」

- 1 「軍事教練」の定着と停滞、強化へ
- 2 小樽高商の「軍事教練」

五 小林多喜二と小樽高商軍教事件

- 1 「老いた体操教師」の造形
- 2 軍教事件との関わり
- 3 『北方文芸』への寄稿
- 4 「転形期の人々」の造形

1926年の卒業アルバムから



はじめに

大正末年、小樽高等商業学校の名を全国に一躍知らしめたのは、「軍事教練」反対運動であった。文部省・陸軍省の「軍事教練」導入の初発にあたり、配属将校による「無政府主義者団は不逞鮮人を煽動し此機に於て札幌及小樽を全滅せしめん」という想定が、学校内外に大きな抗議運動を巻き起こし、全国的な軍教反対運動の口火となったのである。それは高等教育史や学生社会運動史上の著名な事件として記憶されるだけでなく、軍隊における「思想問題」対応の画期としても注目される事件であった。

本論では、関連史料を掘り起こし、できるだけ事件の具体的な展開過程を追うことに努める。その際、なぜ、小樽高商において、また小樽において、このような全国的に反響を呼ぶ事件が惹起したのかが焦点となる。合せて軍教反対運動への文部省や陸軍省の対応に注目するとともに、それ以後の「軍事教練」の実施状況を、小樽高商の個別事例も含めて一瞥することにより、「軍事教練」の教育的・軍事的な意味合いにも論及する。

もう一つの課題は、小樽高商を卒業し、小樽を生活と思索の場所として文学への精進をつづけていた小林多喜二の文学と思想の展開に、この母校の軍教事件がどのような意味をもったかを、考えることである。

一 小樽高商軍教事件の歴史

1 「軍事教練」導入へ

学校における現役将校による「軍事教練」の実施が文部省と陸軍省の協定によって実施されることが決まった直後の一九二五年一月、東京高等師範教諭の廣井家太・森悌次郎は「精神鍛錬を目標としての学校教練なる一書」として『新時代の学校教練』を著した。この背景には「世界戦役後列強諸国では、学校及び社会の訓練として、軍事教練をとり入れ、その実行に余念ない有様である」（「自序」）にもかかわらず、「我が国」の「目下の一般青年の状態を見るに、身体薄弱、気力消沈の状が著しい」という、第一線における次のような危機感がある。

青年の意気の作興に資すべき学校教練は不振に不振を重ねて氣息奄奄の状である。即ち現在の学校教練の多くは、予備の将校によつて指導されてゐるが、教ふる人にもさしたる自信なし、教えられる生徒にも熱心がないから、その成績は殆どいふに足らぬ。従つて学校訓育の実績も挙り得ない状態である。この原因は果していつこにあるであらうか。教材選択配列上の欠陥と、教授者の生徒に対する無理解とが、その重なるものではあるまいか。

ことに専門学校の教練は「不振の甚だしいもの」として、「雨が降れば何時の間にか安慰の時間に代り、よしやるにしても、緊張味を味ひ得らるゝ程度のものは、到底求め得べからざるのが目下の現状である」と慨嘆する。著者らが「学校教練」に求めるのは、「意志の鍛錬と、規律的訓練」である。森有礼文相によって提唱され、その嚆矢となった東京高等師範においてさえ、「軍事教練」は「不振に不振を重ねて氣息奄奄の状」だったのである。

こうした状況はかなり前から文部省当局者には認識され、事態打開のための措置が取られはじめていた。一九一七年一〇月、臨時教育会議は「学校ニ於ケル兵式教練ヲ振作シ以テ大ニ其ノ徳育ヲ裨補」することを建議する。その後、文部省では二二年以来、陸軍省と「数次ノ交渉」を重ね、ほぼ成案がまとまるとともに、二四年一二月、文政審議会に中等学校以上の「学校教練ノ振作」について諮問する。そこでの岡田良平文相の説明にも、「時勢ノ変遷ニ伴ヒ社会ノ民心漸ク緊張ヲ欠キ浮華輕佻ノ弊習ヲ生スルニ及ヒ学校ニ於ケル兵式体操モ当初ノ精神ト乖離シ往々形式ニ流レテ心髓ヲ失フノ嫌アリシ」という憂慮があった。文政審議会では、「徳育教育ニ資益シ国防能力ヲ裨補スルノ主旨ニ於テ之ヲ行フヘキ」と答申した。文部省では中等教育以上での実施を梃子に、「一日モ速ニ之ヲ全国民ニ普及セシムルコトヲ切望シテ」おり、さらに青年団への拡大を図っていく（以上、文部省『学校教練ノ振作ニ関スル実施案』、二五年一月）。

これに先立ち、いくつかの中学・専門学校では「付近ノ現役将校ニ生徒教練ノ検閲指導ヲ依頼」したり、陸軍の軍事演習の見学や兵営内での宿泊を実施するところもでてきていた（「岡田文相口演要旨」、二五年四月 文部省『学校教練』第一冊、国立公文書館所蔵）。二三年五月の早稲田大学における軍事研究団の結成も「学校軍国主義化」（菊川忠雄『学生社会運動史』）の試みであった。その直後には、東京外国語学校で校長と予備少佐が「全校学生に銃剣を付けさせて兵式訓練の強制執行」させようとしている、と報じられた（『読売新聞』二三年六月二一日付）。

これに対して、早稲田では「我等は軍国主義に反対し、早稲田大学を軍閥宣伝の具たらしむることに反対す」という学生大会の決議で対抗し、軍事研究団を解散に追い込んだ。中等学校以上で「軍事教練」を正課とする案が文部省と陸軍省の間で協議されていることが報道された二四年秋には、全国学生軍教反対同盟の創設をみるほどの高揚をみせた。猛烈な抗議にさらされるなか、二四年一二月二六日、岡田文相は憲政革新両派招待会の席上で次のように述べ、軍教実施の決意を示した（『東京日日新聞』二四年一二月二七日付）。

兵式訓練は明治二十年以来行はれて来たのであるが、時勢の進むにつれ其訓練が緩み現今の学生は懦弱に流れ、服従、規律、義勇、奉公の念も稍々薄らいで来た。之が矯正には修身その他の学科もあるが兵式訓練が最も有力と思ふ。而して退職将校では軍人精神が次第に薄らぐから現役将校を之にあてたい。然るに今回陸軍省が師団を減少し将校に余裕が出来たから陸軍側と交渉して現役将校を得るに至つた。……反対論もあるがこれは或は戦争を否認せんとする平和論者の説ではなからうか。又中には現在の常備軍を更に強めるものであると云ふものもあるがそれも当らない。尚軍隊は資本家の無産階級に対する圧迫の具であると云ふのもあるがそれはユートピ안의言に過ぎない。

岡田文相は宇垣軍縮による余剰将校の活用を率直に語る。陸軍ではそうした理解を否定したものの、世論の軍縮傾

向に配慮しながら、この「軍事教練」の目的を文部省に同調して「学生生徒ノ心身ヲ鍛練シ団体的觀念ヲ涵養シ以テ国民ノ中堅タルヘキ者ノ資質ヲ向上シ併セテ国防能力ヲ増進スルニ在リ」(「教練実施ニ関スル要項」前掲「学校教練」第一冊所収)とした。

文部省(専門学務・普通学務・実業学務局長)と陸軍省(軍務局長)との間でまとまる「教練ニ関スル覚書」(二五年二月)、「教練教授要目」(二五年四月)によれば、師範学校・中学校などは「各個教練 部隊教練」「射撃」「指揮法」「陣中勤務」「軍事講話」などの教材が学年ごとに細かく配置されているが、高校・大学予科・専門学校(ここに小樽高等商業学校が含まれる)ではそれらは「適宜配当」して実施することになっていた。教授時数は師範学校などが毎週二ないし三時間、野外演習日数が毎年四ないし六日間に対して、専門学校などはそれぞれ一・五時間、四日間となっていた(大学は「適宜」)。この通知を受けた東京商科大学では、付属専門部における「体操科配当時間数ハ何レモ各学年毎週三時間ニ有之候ニ付同時間内ニ於テ御通牒ノ教練実施上支障無之」と実業学務局長宛に回答している(二五年四月二五日付「学校教練」第一冊)が、他の学校でも同様に対処しただろう。小樽高商の場合は、毎週二時間(週三四時間中)が「体操」の時間だったが、一・五時間を「軍事教練」にあてることになった。

私立専門学校・高校などは学校の任意とし、大学(学部)は希望の学生とした。ただし、在営年限短縮の恩恵があったため、東京帝大では「軍教熱」が高まり、「徴兵猶予中の学生が動き出す」という動きもあった(『教育週報』第四号、二五年六月三〇日)。

軍務局歩兵課作成の「学校教練査閲心得」に付された「教練程度表」では、専門学校などでは中学校などの「既習事項ニ習熟セシメ特ニ幹部トシテノ技能ヲ向上シ成シ得レハ簡單ナル大隊教練ヲ行フ」とある。また、「軍事講話」においては「国防ノ本義、建軍ノ本義、帝国軍制ノ綱要」などへの理解を深めるとある(「大日記甲輯」一九二五年防衛研究所図書館所蔵)。

前述した文政審議会の答申中の「実施上ニ就キ希望スル所」の第一に「配属将校ノ監督ニ関シ文部陸軍両省ノ系統ヲ明カニセラレタキコト」(文部省『学校教練ノ振作ニ関スル実施案』)とあったように、配属将校の身分・処遇に両省は神経を使った。「教練実施ニ関スル要項」では「配属将校ハ業務上ニ関シテハ当該学校長ノ指揮監督ヲ承クルコト」とされ、岡田文相は配属予定将校の召集に際して、「諸君ハ他ノ学校職員ト和衷協同シテ青少年ノ教養ニ努力セラレ」(「学校教練」第一冊)よ、と呼びかけた。また、宇垣陸相も「複雑ナル社会相ヲ正解スルコトナク軍隊ニ於ケルカ如キ一本調子ノ方途ヲ辿ルニ於テハ蹉跎相踵クノ恐鮮カラサルヘシ」として、特にすでに「教練ニ従事シアル在郷武官」との「競争拮抗」を注意し、「軍隊ト地方トノ聯結」に努めよと述べた(また、軍教反対者に対して「反対ノ為ノ機会ト材料」を与えないことや学生らの「同盟休校」に対して「機ヲ失セス具ニ其ノ原因ヲ尋ネ」、行動すべきことを指示する(「大日記甲輯」一九二六年))。

新聞などでは「軍事教練」あるいは「軍事予備教育」と報じられたが、軍教反対の思想や運動の広がりを懸念する陸軍省と文部省は、一貫して「学校教練」を用いた。二四年十一月、全国学生軍事教育反対同盟の抗議に対して、文部省の伊東延吉文相秘書官は「軍事教育なんて世間が付けた名前」(『読売新聞』二四年十一月二三日付)と突き放した。

2 鈴木平一郎少佐の配属

小樽高商への配属将校の着任の時期は一九二五年五月ころとみられる。陸軍省では四月の一斉配属を断念し、数回に分けて配属することになっていた。新聞『緑丘』創刊号(二五年六月五日付)には、「先生の移動」欄に、他の二人の新任教官とともに、「鈴木平一郎少佐 旭川第廿七聯隊に御奉職の由この度本校に御見えになられて以来我校の士気益々振ふの感があります」という記事が載る。北海道の各学校には旭川の第七師団から派遣された。『職員録』(二四年七月一日現在)によると、鈴木は第二七連隊の連隊付歩兵大尉であった(第三大隊長だったという証言もある)。陸軍士官学校の卒業(第一八期)で、小樽高商赴任時は四〇歳前後だったと思われる。軍教事件惹起によっても更迭されることはなく、任期を全うし、二七年四月、姫路の歩兵第三九連隊留守隊の連隊付少佐となる。

「我校の士気益々振ふの感」と持ち上げるのは、他の新任教官についても同様であり、礼儀



1926年卒業アルバム

的な歓迎の辞といってよいが、この鈴木という配属将校に対する任期中の学生の評価は低いものではなかった。『緑丘』第二号（二五年七月一日付）には、新聞部員の官舎訪問記事（一部破損）があり、親しみやすさがうかがえる。部員の「一年志願兵」についての質問には「入営後はなまけちや駄目です」と答え、「規律と礼儀の国に二十何年も居た者の目には諸君のやり振」は不適切だとして、「教師よりも先に出て行く学生を見たが些細な事だが授業の前後は一斉に敬礼するといふと思ふね」と苦言を呈する。

軍教事件がほぼ沈静化した一二月九日、伴房次郎校長が第七師団参謀長斎藤瀏宛に回答した「配属将校勤務成績通報」（一二月四日付の照会）における、鈴木少佐についての勤務評定は次のようなものである（「秘文書綴」一九二五年度 小樽商科大学所蔵）。

一 性格、品行

寡言沈着ニシテ品行方正本校職員トノ交際円満生徒ニ信望アリ

（略）

三 服務ノ状態

熱心真面目ナリ

四 服務ノ成績

成績良好ニシテ配属以来本校生徒ノ動作規律等大ニ改マリタルヲ認ム

後述する「五 其他考科ニツキ参考トナルベキ件」で軍教事件に触れるところは、事件惹起の当事者だけに学校側としては全面的に庇護するが、「性格、品行」や「服務ノ状態」については過褒にすぎることではなく、妥当なところだろう。「極めて磊落、決して学校教育を軍事色で圧倒するというような態度は見られなかった」（大塚武雄『『緑丘』新聞創刊のころ』『緑丘五十年史』）、「軍人らしからぬ非常に常識豊かな人格円満な人であったため学生も鈴木少佐個人には親しみを持ち、何んのトラブルも起きなかった」（大和田正彦「軍教事件の思い出」『小樽商大緑丘会報』第二五号、一九六七年一〇月一〇日）という学生の鈴木評がそれを裏付けよう。事件中の一〇月二五日付『北海タイムス』の記事にも、「校内学生の同問題に対する態度は至極穏健であり渦中に入る様な形跡の何等認められないのは鈴木少佐個人の平常が教授学生間に非常に好感を与へて居る事に原因して居る」とある。

しかし、「本校生徒ノ動作規律等大ニ改マリタル」という勤務評定はやはり甘すぎる。学生たちは「軍人らしからぬ非常に常識豊かな人格円満な」鈴木に性格に乗じるかのように、あるいは高等教育機関での「軍事教練」実施のルーズさを見越してか、「教練の方は相変わらずダラダラで従来とあまり変らなかった」（大和田「軍教事件の思い出」）のである。

鈴木少佐の着任後まもなく、五月末から「軍事教練」が始まった。六月二五日には、三年生による「斥候搜索、中隊教練、接敵運動」という第一回野外演習が高島で実施され、「頗る成績良好」だったという（『小樽新聞』二五年六月二七日）。その際の想定は「敵艦一隻突如塩谷近く顕はれ早くも上陸せる報達し市民愕然色を失する所、精鋭なる高商義勇軍最新戦法によつてこれを手宮公園付近に喰止め、撃破する」というものだった。この想定の大仰さ・勇ましさぶりは一〇月の演習想定に通じるものがあり、鈴木少佐の好むところだったともいえる。『緑丘新聞』第二号（二五年七月一日付）は、これに続けて「風雲急を告げし手宮の空も我軍の向ふ所敵なく、小樽は再び安らかな商業市に返つた。小樽高商義勇軍万歳」と無邪気に礼賛する。さらに七月一日には一年生の、七月八日には二年生の野外演習が実施された（想定は不明）。すでに小樽高商社会科学研究会は創設されていたが、これらの軍事教練に反応した形跡はない。

3 小樽高商社会科学研究会の創設

一九二五年四月、M S S（Marxian Student Society）の名で研究会（読書会）の呼びかけがあった。高橋（のち石田姓）興平は次のように回想する（『小樽高商時代』『いしだぜみの友』三〇、一九八七年）。

高商二年の春になって、私の学問的関心が再びマルクスに向きかけていた矢先、M S

S（Marxian Student Society）の名で社会科学研究教程がはり出され、そこにはマルクスの資本論、経済学批判は勿論、英訳のAnti-Dueringから、レーニンの帝国主義論 State and Revolution、更にクノーの「マルクス、歴史・社会国家学説」のドイツ語原本など、十数冊の書名があげられていた。前年の弁論会をきいてから、

此の学校に話せる先輩はおらんのか、と思い上った心が、これによってペシャンコにうちくだかれた。指定の日、指定された場所に行ったら、大分年上の先輩が、さしあたり、レーニンの帝国主義論と State and Revolution をテキストとして研究会をやるというのでそれに参加した。研究会の場所は高松勤教授のお宅であった。

高橋のほか、二年生の山本安次郎・手嶋恒二郎・合田正巳らが参加した。「年上の先輩」とは当時二六歳の斉藤磯吉であり、さらに黒田力造や小林多喜二の友人である寺田行雄（いずれも三年生）が加わっていた。「学園内の革新思想の指導的立場にあった」（西野嘉一郎「思い出の記」『緑丘五十年史』所収）



大正15年1月13日 小樽高商在学中（中段左から2人目手嶋
前段左から2人目斉藤磯吉 3人目寺田行雄 4人目黒田力造の各氏）

『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』より

高松勤教授の自宅で週二回開かれ、表向きは「読書会」ないし「マルクス研究会」と称したが、これが実質的には小樽高商における社会科学研究会であった。研究会の中核となった斉藤らが高松の下に結集しはじめたのは、二四年中であつたと思われる。先の呼びかけで学内にその姿をあらわすと、急速に研究会は拡大し、「四、五十名」を擁したという（倉田稔『小林多喜二伝』）。二五年には斉藤を代表委員として、東北学連にも加わったとみられる。

ここで北海道警察部特高課がまとめた『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』（一九三一年六月、『特高警察関係資料集成』第九巻所収）の関連記述をみる。三・一五事件前の北海道地方評議会に関する小樽の叙述のなかに、「大正十五年五月境一雄、佐藤喜代治、黒田力蔵、大西喜一、古川友市及斉藤磯吉（高商）等ヲ中心ニ組織サレタル政治研究会小樽支部」という一節がある。黒田力蔵は「力造」の、古川友市は「友一」の誤記であり、政治研究会小樽支部の結成も「十五年五月」ではなく、「十四年五月」である。そのような不正確さはあるものの、政治研究会小樽支部の結成メンバーに黒田・斉藤という高商学生やのちに小林多喜二が参加する社会科学研究会（小樽高商社研とは別）の中心人物の古川が加わっていたと、警察当局は把握していた。斉藤・黒田は学校内で社会科学研究会を立ち上げる一方で、学校外の社会運動にも積極的に参加していたと思われる。

手嶋恒二郎の回想手記にある、「ヒルハーデイングの金融資本論とか、ニコライ・レーニンの帝国主義論とか、ヘーゲルやフョーエルバッハの研究とか、タールハイマーの史的唯物論とか、そういうものの研究が、或いは大衆討議の形式で、或いはそれぞれの小さな研究グループの形式で、ともかくも大へん活発に進められていった」という様子が、社研としての活動だったと推測される。高橋は斉藤の借りていた下宿に移り、個人的にも斉藤の「猛烈な教育」（「小樽高商時代」）を受ける。

さらに手嶋の回想によれば、「学内に流れていた空気はとなると、どうしてあかも朽はずれて、いわゆる「国家主義」的なものからは遠いものであつたのだろうか」という。大胆に言えば、高松勤を顧問格とする社会科学研究会を中核としつつ、その外側にも「いわゆる「社会の構成と変革の過程」を追求するための経済学、つまり反資本主義経済学」（以上、久城壽右衛門編著『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）を受容する教員・学生が広範に存在していたということになる。

その一つの例証が、来樽した大山郁夫や櫛田民蔵の学内での公開講義である。「政治と社会と大衆とを結びつけた学問的講演というよりは、どちらかと言えば政治的啓蒙演説といった調子のものであつた」（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）大山と櫛田の講演は、学生たちに多大な感銘を与えたと手嶋はいう。五月一〇日（推定）におこなわれた大山の講演は「社会科学の人生価値」と題するもので、「現代学生間に漸次社会科学の研究運動が起つて来た」に始まり、「人類の生めるものは人類に帰せ。特権階級の蹂躪に任す勿れ」という結論に導いたようである（『緑丘』創刊号・第二号に学生の筆記として掲載〔一部破損〕）。この大山の講演の経緯について、中野清一「多喜二の執念」（『緑丘』「小林多喜二特集」）によれば、二五年五月何日か、弁論部の西野嘉一郎・西川正巳・中野に対する、同期の斉藤磯吉の「近く小樽で政治研究会支部を発足させる。そのために大山郁夫先生を迎える。序でに高商でも弁論部主催の恰好で講演会を開いて欲しい」という要望に応じたもので、「弁論部長であられた苔米地先生も快よく承認して下さい」という。

櫛田の講演は七月二日と三日、三年生向けに「マルクスの価値論」と題しておこなわれた（『小樽新聞』二五年七月三日付）。学校側公認の、もしくは学校側の招聘による講演であり、そうしたことが可能となる雰囲気は軍教事件

以前にはあったのである。手嶋はこの後、北海道内を巡回講演する大山の「秘書のような役回り」もしたという。後述する大山の小樽高商軍教事件への関心の強さは、この講演に起因するところもあるだろう。

軍教事件の惹起した直後の一〇月二三日、市内の小樽倶楽部で「農村社会問題講演会」が開かれ（三宅正一や杉山元治郎らが演壇に立つ）、司会の境一雄（小樽総労働組合）は冒頭で「過般小樽高商に起つた軍事教育想定問題」を取り上げた。一〇月二五日付の『小樽新聞』は「聴衆数百名特に小樽高商学生が数十名一団となつて居つた」と報じるが、この「数十名一団」が小樽高商社会科学研究会のメンバーだったのではなかろうか。

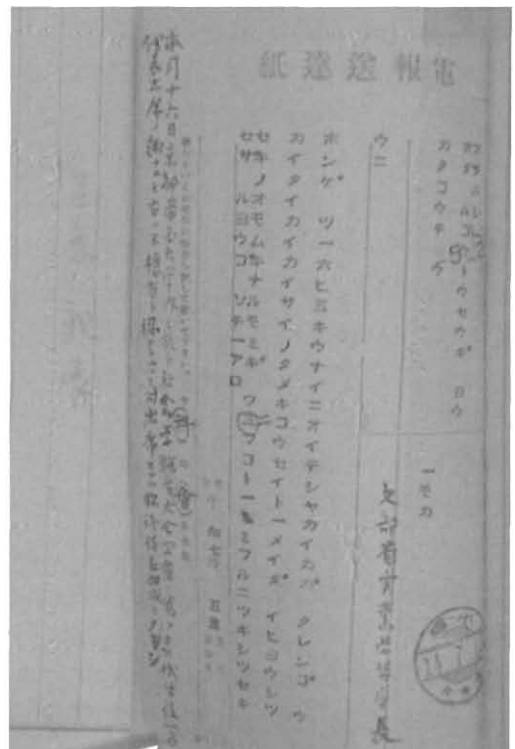
なお、『緑丘』第三号（二五年一〇月六日付）には「NNKは斯く語る」と題する文章が載る。筆者は「イソキチ」であり、その内容から斉藤磯吉の可能性がある。「頭の中を窺つて見ろ、生活の現実を凝視せい、クヅ籠の様なゴミ箱のやうな、取るに足らぬ観念や概念や信仰や自信で一杯な頭。つくりつけの人形の様な、身動きとれぬ土偶にも等しい、意志なく行動なき生活の現実。価値に溢れ、権威に圧潰されて、時代は、社会は、君は僕は、教師は生徒は、悶がき喘へである」として、「人間の歴史は解放への歴史、闘争の歴史であつた。価値は懷疑せられ、批判せられ、権威は抗争せられ破綻せられ没落し去られた」、「汝意志なく行動なき人間となる勿れ」と論じる（「NNK」については不詳）。この執筆者が斉藤磯吉でなかった場合でも、こうした権威や秩序からの解放をめざす思想が高商内には厳然と存在していたのである。

後述するように、小樽高商における野外演習の想定を最初に問題視したのは、小樽の労働組合、政治研究会小樽支部や朝鮮人労働者であったが、これらに呼応した校内の社会科学研究会の活動に対して、文部省からの指示も受けて、学校当局は逸早く抑圧の態勢をとった。それには、軍教事件以前の二五年七月、次のような事態が現出していたことも影響していたと考えられる。

七月一三日、文部省実業学務局長から校長宛に「本月十六日京都帝国大学内ニ於テ社会科学聯合大会開催ノ為メ貴校生徒一名代表出席ノ趣ナルモ右ハ不穩当ト認メラル、ニ出席セサル様御措置相成リタシ」という電報が送られてきた（『秘文書綴』一九二五年度 以下、本項はこれによる）。これに驚愕した学校当局は「極力各方面ヲ調査シタルモ其ノ形跡ヲ認メス何カノ間違ヒナルベシ」と回答したところ、警視庁から「本校生徒出席スヘキ筈」という通報があり、あらためて調査をおこなったが、「真事実」を見出せなかった。一六日夕刻、京都帝大から「本校生徒ノ出席者無之旨」の通知があり、ひとまずこの問題は落着した（実業学務局長宛小樽高商校長電報、七月二九日付）。

大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』一九二六年版には、この第二回学連全国大会について「各校代表出席者八十名。各高等学校、山口、神戸、小樽、高岡、長崎高等商業学校の学生は入場を禁止され」とある。すでに二四年一〇月の全国高校長会議において社会科学研究会解散の方向が打ち出されると、まもなくほとんどが解散を強要されたが、それが各高商にも波及してきたのである。京都府警察部の特高課長が臨監する警戒下、京大学生監の指示で「軍事教練に関するテーゼ」は撤回を余儀なくなされるが、翌日の秘密会で「反軍教運動」が協議されるほか、「学連テーゼ」の討議により「無産階級解放運動の一翼としての立場に立つ学生運動」（菊川忠雄『学生社会運動史』）の方向性が明確化された。あるいは、この秘密会に小樽高商社研からの出席があったかもしれない。

七月二七日付の実業学務局長宛の小樽高商校長の電報には、「本校ハ北日本ニ於ケル重要ノ地ニ存在スルヲ以テ平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払ヒツ、アルニ首題ノ如キ事ヲ聞クハ誠ニ遺憾ニ存候」とある。「北日本ニ於ケル重要ノ地」とは、北海道各地、樺太・千島列島、さらにシベリアに向けて経済・交通の要衝となっていた小樽という地勢上の重要性、そして北海道における人文・社会科学系高等教育機関という自負だろう。それを十分に自覚し、「平素思想ノ善導ニ細心ノ注意ヲ払ヒツ、ア」ったというのが、その「思想ノ善導」の具体的な内容は不明である。



この事件の惹起を受けて学校当局では「若シヤト存ゼラル」こととして、二四年一二月の学則改正によって選択科目に加えられた「社会学」が「誤リ伝ヘラレタルモノニハ非ルヤ」と推測を加える。当時、これについては地元の小樽警察署「高等刑事部長」から問合せもあり、「危険思想ト社会学トハ全然異ル事」を説明し、さらに「思想上ニ就テハ聯絡シテ未然ニ防ガント打合セ」もしたという。かつて、初期社会主義運動の草創期、「社会学」が「社会主義」と混同されたことが想起されるが、一九二〇年代にあってもこうした誤解が存在し、「社会主義」＝「危険思想」に対して過敏に反応したのである。この二五年七月の時点ではまだ校内の社会科学研究会の存在をつかんでいないとはいえ、その動静について警戒を強め、情報収集に乗りだしたことは確かであろう。また、「思想上ニ就テハ聯絡」の取り決めのあった小樽警察署にこの情報が通知されていたとすれば、警察の観点から独自の監視態勢をとっていたことも推測に難くない。

4 小樽社会運動の上げ潮

後述するように、小樽高商の軍教「想定」に敏感に反応し、抗議行動に打って出るのは、政治研究会小樽支部や小樽総労働組合であるが、それが可能となる小樽の社会運動の高揚ぶりを一瞥しておこう。といっても、主に依拠するのは北海道警察部特高課編『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』という官憲側資料である。三・一五事件までの小樽の状況について、次のように叙述する。

大正十四年八月組織サレタル小樽総労働組合力全年十月評議会本部ヨリ招聘応援ノ為　メ来樽セル山本懸蔵ノ
宣伝ニ共鳴直ニ評議会加盟トナリ次テ評議会ノ指導ノ下ニ極力組合ノ拡大ニ熱狂中翌大正十五年二月十三日別ニ
評議会所属下ニ全道左翼労働組合ノ統制指導ノ為札幌、室蘭、函館等ノ左翼組合ノ支持ノ下ニ地方評議会ヲ結成
シ又一面地評中心人物鈴木源重、正木清、渡辺利右衛門等ニ依リテ労働農民党北海道支部連合会ヲ小樽ニ創立シ
全ク小樽ハ政治的、経済的左翼運動ノ中心地トナレリ、三千ニ余ル労働者大衆ノ啓蒙ト左翼結成運動ノ為メニハ
各工場、職場等ニ夫々綿密ナル連絡指導ヲ保チ労働者職工等ノ不平不満ヲ悉ク之ヲ捉ヘ闘争題材ニ供シ其ノ紛議
ニ至リテハ枚挙ニ遑ナキ処ナル

まだ軍教事件の時点で小樽は「政治的、経済的左翼運動ノ中心地」となる萌芽の段階であり、磯野争議・港湾争議を通じて急成長していくわけだが、その前提となったのは、二五年五月の政治研究会小樽支部と八月の小樽総労働組合の結成、一〇月の評議会への加盟であった。小樽でのそうした急速な社会運動の上げ潮のなかで高商の軍教事件が惹起したのである。

五月の政治研究会小樽支部結成の契機となったのは、大山郁夫の来道である。札幌の時計台における講演会について、九日の小樽倶楽部での講演会は「傍聴者約四百名に達し満員の盛況を呈し」（『小樽新聞』二五年五月一日付）、境一雄らによる支部結成に導く。

小樽総労働組合の結成について、『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』は、日本労働総同盟から分離独立した日本労働組合評議会の渡辺政之輔の「委託ヲ受ケ本道ニ於ケル労働情勢視察ノ為メ松岡二十世、稲村順三等来道」を契機にあげる。「労働団体ノ急務ナルヲ痛感シ寄々其ノ計画中」であった坂本佐一郎・菊池米吉・清水清らがこれに呼応し、松岡らの演説会を開催した。松岡らが「極力労働者ノ向上ハ労働者相互ノ協調団結ノ喫緊事ナルコトヲ強調」したところ、「会同セル約百五十、六十名ニ痛ク共鳴ヲ与ヘ」たという。ここで坂本らは政治研究会小樽支部長の境を「勧説」し、「仲仕人夫鉄工職工其他自由労働者等ヲ合算シ組合総員六六三名ノ豪勢」を擁する小樽総労働組合の結成にこぎつけた。この記述は、後述する小林多喜二「転形期の人々」の描写と重なるほか、『無産者新聞』第四号（二五年一月一日付）の「北海道の労働運動」と題する次のような記事と照応する。

眼を小樽に転ずれば資本家の狂暴無比なる同地方にも今年以来、組合運動の火の手があがり、仲仕一千名を中心とし小工場の労働者も参加せる小樽総労働組合が菊池、清水、渡辺等の諸君の手によりて生れ出で、同地方の海員組合刷新派と共に堂々の戦ひをなしてゐる。……去る十月十二日には小樽総同盟組合主催にて全道労働組合大演説会が開かれたが、これを機として函館、小樽、札幌、室蘭の間に密接の關係が作られ北海道労働組合地方評議会の促進運動の約束が成立した。

結成直後の小樽総労働組合が直面したのは、「指導連絡」する中央の団体を右派の総同盟と左派の評議会のいずれにするかであった。両派の代表を招いて演説会を開くことになり、総同盟から松岡駒吉が、評議会から山本懸蔵が来

樽し、一〇月、相對峙した。この様子も多喜二が「故里の顔」や「転形期の人々」で描くところだが、『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』も、松岡が「世界的な大勢ヲ論シ而モ観念的理想論ニ趨リタルニ反シ其後ニ出演セル山本懸蔵ハ松岡ニ反シ「己ハ見ル影モ淡キ一介ノ小樽ニ住メル浜稼労働者ノ地位ニ於テ」……ト前提シ社会的ノ圧迫、私生活ノ逼迫ヲ縷説シ労働者自身ノ向上ハ労働者各自ノ団結抗争ノ一事アルノミ等々言タイト平易ニシテ肺腑ヲ穿テリ、意識低キ労働大衆ニ高遠ナル松岡ノ理論ハ画餅ニ等シク果セル哉何物モ得ズ是ニ反シ山本懸蔵ハ絶大ナル共鳴支持ヲ得タリ」と詳細に述べている。すぐに、この演説会で評議会加盟が一決された。その後、山本は「札幌、室蘭及函館ノ各地ヲ視察シ秘密裡ニ夫々評議会指導下ニ左翼労働組合ノ結成ヲ促」した。この直後の軍教反対運動を経て、翌二六年二月二三日、三田村二郎を招聘して、小樽倶楽部で北海道地方評議会の結成へと進む。なお、山本懸蔵は小樽高商軍教事件への抗議運動のため、関東地方評議会の代表として再度来樽する。

こうした小樽の無産運動・労働運動の上げ潮のまさに渦中で、小樽高商軍教事件は惹起した。この上げ潮に棹さすことによって、軍教事件は学内の事件にとどまらず、社会的に大きな反響をもちえた。そして、小樽高商を卒業して一年半あまりの小林多喜二は、この母校の軍教事件と反対運動を間近にみていくなかで、新たな文学の模索と社会主義の思想・運動への理解と実践を深めていくことになる。

二 小樽高商軍教事件の惹起

1 野外演習の実施

一九二五年一〇月一五日、小樽高商の全学年の参加する野外演習がおこなわれる当日の『小樽新聞』朝刊二面・三面の欄外に、「高商野外演習」の記事が載った。「高商では今十五日全校生の野外演習を朝里川水源付近に於て催す事となつたが午前九時校門を出発し主に地図の研究と伝令の演習を為す筈である」として、「当日の想定」が示された。その二には「無政府主義者は〇〇〇〇を煽動し此機に於て札幌市及小樽市を全滅せしめんと」とあった。これが『小樽新聞』に掲載された経緯について、後日『緑丘』第六号（二五年一二月一七日付）は、「十月十四日本校服務陸軍歩兵少佐鈴木教官は其の立案せる想定を教務部主事教授村瀬教授に示し其の承認を求め後之を謄写版印刷に付せり

当時偶小樽新聞記者学校に居合せ翌日執行の教練に関し尋ねる処ありたるを以て教務部主事は想定文中「不逞鮮人」の四字を「〇〇〇〇」として其の一葉を交付せり」と報じている。教務部主事村瀬玄は「簿記」・「商業実践」を担当しており、留学から帰国してまもなくだった。「不逞鮮人」を伏せ字とする措置をとりつつも、小樽新聞記者も含め、想定自体を不穏当とする意識はもっていなかった。このとき伴房次郎校長は東京に出張中であり、想定文を目にしていけない公算が強い。そして、一五日の欄外記事が注目を引いた形跡もない。

なお、同日の『小樽新聞』の社説は、偶然だが「一般青少年の軍事訓練 訓練時数に就て」というものだった。中学校以上の軍事教練は四月以降実施済みであり、陸軍省・文部省はこの勢いを駆って、青年団での軍事訓練を決定し、さらに小学校まで及ぼそうとしていた。「未決の問題」として残されている訓練時数と在営年限の短縮の考え方について、陸軍省側の頑迷さを批判する論調で、「軍事教練」自体にはその小学校までの拡充を当然としている。後述するように『小樽新聞』は『北海タイムス』に比べて軍教事件の報道において質・量ともに見劣りする一因には、この「軍事教練」への感度の鈍さを数えてよいかもしれない。

さて、鈴木少佐が立案し、一五日朝、集合した学生たちに配布（各クラス五枚ずつ）した「想定」は、まず天狗嶽（現在は天狗山と称する）を中心とする大地震により、小樽・札幌市内の家屋は倒壊し、折からの西風で火災が勢いを増し、「今や小樽市民は人心恟々として適従する所を知らず」という状況が示され、ついで問題の部分となる（『緑丘』第六号掲載のものによる）。

二、無政府主義者団は不逞鮮人を煽動し此機に於て札幌及小樽を全滅せしめんと小樽公園に於て画策しつつあるを知りたる小樽在郷軍人団は忽ち奮起して之と格闘の後東方に撃退せしも敵は潮見台高地の天嶮に抛り頑強に抵抗し肉飛び骨砕け鮮血満山の紅葉と化せしも獅子奮迅一步も退かず為に在郷軍人団の追撃は一時頓挫するの止む無きに至れり

そこで、小樽高商生徒隊の出動となり、「其任務は在郷軍人団と協力し敵を殲滅するにあり」とされる。いうまで

もなく大地震による都市の壊滅状態と「人心恟々」、無政府主義者・「不逞鮮人」による破壊行動という想定は、二三年九月の関東大震災時の被災状況および官憲・一般民衆の無政府主義者・「不逞鮮人」への根拠なき警戒と迫害を下敷きとしている。在郷軍人団と無政府主義者団・「不逞鮮人」の戦闘を「肉飛び骨砕け鮮血満山の紅葉と化せし」と演出過剰に描写するところは、鈴木少佐の個性であろう。

関東大震災時を具体的に連想させる想定をするのは、鈴木が属する第七師団の一部が震災直後に救援と警備のために派遣されており、その経験に伝聞的であれ身近に接していたことがあったと考えられる。そのうえで無政府主義者を持ち出す点は、当時の陸軍に広範にあった「思想問題」への警戒に加え、北海道における無政府主義者の動静に鈴木が何らかの関心を持っていた可能性がある。北海道旭川を中心に活動していたアナキストのグループ「鎖断社」に対しては一九二四年九月の検挙（のち釈放）などの警察の取締がおこなわれていたが、二五年六月にも「鎖断社一味が旭川で何事か企む」（『小樽新聞』六月四日付）、「旭川に入込み主義者たくらむ 旭川署目をつく」（同、六月一〇日付）などとたびたび報じられていた。九月には小樽鎖断社の演説会が開催されている（渡辺惣蔵『北海道社会運動史』）。おそらくこれらの記事を読んだ鈴木少佐が「鎖断社」＝「無政府主義者団」の動静に関心を払い、想定に反映させたことは十分に考えられるのである。

「不逞鮮人」を持ち出すのは、特に小樽に多く集まっていた在留朝鮮人への注目があったからであろう。主に樺太の木材積出しの出稼ぎや荷役労働などに従事する朝鮮人約三千人が、小樽港周辺に集住していたという。かなり後の三六年の北海道庁特高課の作成した「本道ニ於ケル最近ノ極左運動概況」（『北海道重要事項概要』、北海道立図書館所蔵）中にある、在留朝鮮人に対して「民族的意識濃厚ニシテ常ニ嫉視偏見ノ挙措多ク之ガ為内鮮人間ニ不測ノ紛議ヲ惹起セル事例少カラズ殊ニ本道ハ地理的関係ヨリ不逞鮮人ノ潛入ニ就テハ特ニ警戒ヲ要スベキ状勢アル」というような認識を、鈴木少佐は抱いていたのではないだろうか。

学生たちは、また教員も、当日、この想定にもとづく野外演習に何ら反応しなかった。授業の一部となった「軍事教練」そのものにも学生らの受講態度が真剣で熱心なものでなかったことは、「正服、和服、正帽、カンカン帽又は無帽、靴に下駄という具合に全く色とりどりの格好で教練を受けた」（中村太郎「緑丘を遙かに偲んで」『緑丘五十年史』所収）という学生の服装ぶりが物語る。小樽高商の学生新聞『緑丘』第五号（二五年一月一六日付）の「文芸」欄に「陣中要務令」という小文を寄せた那河捷平は、次のように叙述する。

カーキ色の軍服の教官はF達に銃を擔はせた。冷い鉄の奇怪な型をした重い銃が、Kにはことの外うれしく思はれるのであった。子供の様に、はづんだ心持で、Fは長い縦列の中に入つて、青い芝生の上を号令のまゝに歩き廻つた。やがて紫色の影を引いた縦列は白い校舎のわきの木陰に行進して行つた。

教官は赤皮のカバンを腰のあたりにぶらつかせ乍ら、隊列を止らせて「休め」と云ふ号令をかけた。そして、「陣中要務令」の第何節かの講義を始めたのである。

おそらく学生たちは無邪気に「子供の様に、はづんだ心持」で、銃を担ぎ、縦列行進をしている。しかし、「陣中要務令」の講義は「第何条、三回の誰何の声に答えざる者は之を直に殺すべし」というものだった。配属将校の態度は穏和で丁寧だとしても、授業内容は紛れもなく軍事・戦争そのものだった。Fという学生の「憂鬱」はこの「教官の声」に「陰影」を濃くしたと那河は描写するが、大方の学生は毎週の教練や軍事講話を淡淡と従順に聴く。

だが、まだ戦時という緊迫感のない初期の段階では、平板で退屈な教室の授業から解放される野外演習に学生らは「悦んで」参加した。小樽高商軍教事件の発端となる秋の野外演習も例外ではなかった。「たまたま全校生のレクリエーションに代えて小樽郊外にピクニックに出かける事があった。単なる遠足では名分が立たないと思われたか演習ということになった」（大塚武雄「『緑丘』新聞創刊のころ」同前）、「クラス内でも私共のグループは演習の想定なぞはどうでもよい。秋晴れの日をニガ手の教授から解放されて野山をかけ廻れるのだから、小学生の遠足くらいの楽しみはある。……一日中のんびりした演習を終り、夕闇迫るころかがり火を燃し飯盒炊餐に楽しい一時を過して解散したのであった」（大和田正彦「軍教事件の思い出」）という二つの証言は、配属将校の意図・想定とは異なった学生側のノータンキさを率直に語ったものである。師範学校や中学校においては教材配置や野外演習なども厳格におこなわれたはずだが、高校・専門学校や大学では、まだしばらくの間、こうしたルーズさが許されていた。配属将校や学校当局が軍教反対の動きを警戒し、厳格な運用を抑制ないし遠慮したことが大きな要因だろう。

学校新聞『緑丘』は一二月一七日発行の第六号に至って初めて「天下の視聴を聚めた 軍教想定問題の真相」を報じるが、「当日は軍用地図見方の実際演習が主たる目的で全校生は銃は勿論佩剣もせず唯小樽近辺の地図を携帯した

のであります。秩序だつた遠足と云ふ形」という状況はその通りであろう。むしろ「秩序だつた遠足」という表現には修飾があり、実態は「秋晴れの一日をニガ手の教授から解放されて野山をかけ廻れる」気分にはなっていた。高商社研メンバーも、自ら想定「不穏不公正」に気づいたわけではない。リーダー格の齊藤磯吉は後期を休学中で、野外演習に参加していない。

この想定「不穏不公正」は際立っていたとはいえ、唯一突出したものともいえなさそうである。一〇月二八日に山形県鶴岡中学で実施された「発火演習」の想定は、「我国内は今や大乱に次ぐに大乱起り我庄内近傍袖浦（日本海岸の一漁村）方面にも社会主義の団が突如ぼつ興し南下しつゝあり」というものだった（『東京朝日新聞』一〇月三一日付）。また、東北帝大の配属将校が作成し、各学校に配布した『軍事教育指針』には、「己の敵を屠むるは、趣味もあり、壮快でもある」という一節があったという（『無産者新聞』第六号、二五年一月一日付）。小樽高商軍教事件後は、その教訓を踏まえて突飛な想定は避けられるようになるが、まだ「軍事教練」実施第一年目においてはこうした「不穏不公正」な想定が出現する余地はあったのである。

2 想定への抗議

野外演習自体は一五日午後二時に終了し、学生たちは帰宅した。おそらくその夜になって、演習に参加した社研のメンバーが下宿に持ち帰った「想定」の印刷物を、訪ねてきた政治研究会小樽支部代表・小樽総同盟組合執行委員長の境一雄が目にして、その不当性を問題にし、ここに事件が惹起した。演習を欠席していた齊藤磯吉も、この場に居合わせ、事件の重要性を認識した。

学校側が作成した「経緯」（『緑丘』第六号所収）によると、「十六日午前九時頃政治研究会小樽支部代表、小樽総労働組合執行委員境一雄、小樽在住朝鮮人金龍植外数名は校長出張不在中なるを以て首席教授中村和之雄を其の宅に訪ひ前日実施せる野外教練を以て不穏当不公正なりと為し之に対する学校当局の声明書を要求せり」と抗議行動の第一歩が踏み出された。高商社研メンバーから伴房次郎校長の出張不在という情報も得ていたのだろう、中村首席教授の自宅を訪問したのは、翌一六日午前九時という早さだった。「想定」の「不穏不公正」を即座に読みとった境は、一五日夜から一六日早朝にかけて、すばやく行動する。境自身の語るところによれば、「僕は又、当時在樽の朝鮮人団体のリーダーであった金龍植君に連絡し、僕が委員長をしていた小樽合同労組の執行委員会を召集した。正木清、鈴木源重、渡辺利右衛門、武内清の諸君などで代表者を定めて、金君等と学校に対する抗議を開始した」（倉田『小林多喜二伝』による）。金龍植や小樽総労働組合執行委員への連絡と協議は、一五日夜中になされたはずである。境がこの「想定」に即座に反応したのは、早稲田時代に大山郁夫の薫陶を受け、その軍教反対の主張に共鳴していたからである。

この一六日には、「小樽総労働組合 小樽在住鮮人一同 政治研究会小樽支部 小樽無産青年同盟 政治研究会札幌支部 北潮時報社」の連名で「抗議声明書」が発表された（一〇月二六日付の『無産者新聞』号外に抄録。北潮時報社については不詳だが、『無産者新聞』発刊後まもなくその小樽支局となっている。住所は小樽市稲穂町六の一七

堀川喜代治）。「明白に「不逞鮮人」と云ふが如き文字を使用し、其の演習の直接的対抗者、或は仮想敵を以てするに朝鮮人とするが如きは、此れ、重大なる社会問題たると同時に人種的問題である」と迫るとともに、「明白に、軍事教育による学校の軍隊化、軍備化にして、教育上の一大問題」と批判する。ついで、次のように想定「急所」を突く。

他方、異人種間に在りて一片のパンを求め苦しむところある、幾千幾万の、吾等の兄弟たる朝鮮人に対し、稍もすれば「不逞」の名を冠し、悪宣伝を以てし、白日の下にその「殲滅格闘」の実習を教育機関たる学校が、之を行ふに至つては、社会上、ゆるすべからざる所の罪悪である

そして、「吾等は此問題は単に、三千人の鮮人を有する小樽市に発生したる、地方的問題とすることは、出来ない。明白に、資本主義的勢力の全活動の一の表現として、此問題を取扱ひ、全無産階級、及び全朝鮮人の生命に関する大問題として此れに抗議し、同時に、全国的与論を喚起して、戦はむとするものなり」と結ぶ。ここには無産階級における日朝連帯の志向とともに、小樽・北海道にとどまらず、軍教反対運動の全国的な展開という意図も盛込まれている。

学校当局にとって、一六日朝の境・金らの訪問と抗議は唐突な予想外なものであった。中村和之雄は即答を避け、「翌日午前十時」の会見を約束した。校長不在のなか、その夜、中村首席教授・村瀬玄教務部主事・鈴木少佐ほか数名の職員が協議し、「十月十五日本校の実施したる野外教練想定中誤解を招致する虞ある語句を使用したるは教育上遺憾

とす」という内容を口頭で答えると決める。翌一七日午前一〇時、境ら「十数名」の抗議団は先の「抗議声明書」を手渡して、文書による回答と校長との会見を求めた。この会見のやりとりのなかで学校側は「全想定の不穏不公正なること」を認めたと、抗議団側は一〇月二三日付の「抗議質問書」(『緑丘』第六号所収)のなかで述べるが、そうであるとすれば「想定中誤解を招致する虞ある語句を使用した」という事前の決定より、一步踏み込んだことになる。ただし、二一日の会見で伴校長は「不逞鮮人」の使用のみ「不穏不公正」だったと押し戻す。

一七日の会見後、抗議団は鈴木少佐宅を訪い、「野外教練の想定を正当なりと信じて立案せるや否や」を質問する。鈴木少佐は「想定は仮想にして何等根拠なき情況を作為せるものなるを以て教練実施上正当なるものと信ず然れども誤解を招く如き語句を用ひ其の結果諸君の感情を害したるは誠に遺憾に思ふ」と答えた。鈴木は野外教練の想定自体を正当としつつ、「誤解を招く如き語句」を用いたことに「遺憾」を表明するに止まったため、抗議団側は「稍不満の色」を示した(以上、「経緯」)。急遽一九日に帰校した伴校長は、一連の事態の説明を受けたあと、対策の練り直しを図ったとみられる。

新聞が報道するのはやや遅く、一九日の『北海タイムス』が初めてである。「不穏なる想定に各団体奮起 小樽高商の野外演習に軍事教官の発したる」という見出しで、「想定」の一部が引用される。各団体とは「小樽労働組合、小樽在住鮮人、政治研究会小樽支部小樽無産青年同盟、政治研究会札幌支部北潮時報等」で、早くも境らは政治研究会札幌支部などに応援を求めていたことがわかる。また、抗議の鋒先は小樽高商当局だけでなく、文部省にも向けられていた。この報道を契機に小樽高商軍教事件が全国的に知られることになった(『小樽新聞』の最初の報道は一〇月二七日付)。翌二〇日には「札幌発」として『東京日日新聞』が、また「小樽発」として『読売新聞』がほぼ同内容を報じることになる(後述)。

二三日付の『北海タイムス』によれば、二〇日夜、小樽各労働団体代表六名は鈴木少佐の自宅を再訪し、「猛烈なる質問」を浴びせ、「甚だ遺憾」「只管謝罪の意」という言質をとりつけた。弁明書の公表を迫ったが、「学校当局と協議の上然るべき措置」を取るという言明にとどまった。

二一日の午前、代表者八名と伴校長の会見がおこなわれた。校長は「野外教練の想定中には無用の語を羅列し聊か思慮を欠きたるを憾みとする旨」(「経緯」)を述べたものの、抗議団の求める声明書の公表はあくまでも拒否した。抗議団の二三日付の「抗議質問書」によれば、校長は「軍事教育の目的は団体教練に在り」と述べており、想定そのものを「不穏不公正」とは認めなかった。また、「社会の疑惑を招き、朝鮮人に不安の感を与へ其の激怒を誘発せしめたることに就き其の責を負ふ」という、おそらく一七日の会見でなされた中村和之雄らの言明も覆した。伴校長は「不逞鮮人」という「一句の使用にのみ不穏不公正を認むる」こととしたのに対して、抗議団側は「一觀念一字句に対して抗議するに非ずして全想定に対して不公正と主張するもの」であった。こうした応酬は、抗議団側が二三日に郵送した九項目の「抗議質問書」で再現しうる。

「抗議質問書」は第一項に「不逞鮮人」の語句使用に対する学校側の見解を問い、第二項から第七項まで繰り返し「想定」とその実施に対する教育上・学校行政上の責任を追及している。それらは、第五項の後半の「今回の想定により暴露したる軍事教育の正体に関し又教育機関の軍隊化内乱の予想等の全精神の不公正に関し学校当局の明確なる答弁を求む」というところに収斂されよう。第八項では鈴木少佐の責任を、第九項では「当該関係者の辞職」を勧告する。これに対する学校側の二七日付の回答は、第一項のみ「教育上遺憾ナリ」としつつ、それ以外については「一種想像又ハ意見ヲ基礎トシテ推論セル予断ノ下ニ作成セラレタルモノト認メ弁明ノ限リニアラズ」(『緑丘』第六号所収)と回答を拒否したものとなった。この回答を不誠実とする抗議団側は、二八日午後、学校に詰めかけたが、交渉は物別れにおわった。

なお、二三日夜には日本農民組合主催の「農村社会問題講演会」が小樽倶楽部で開かれ、司会の境一雄が「開会の辞」のなかで、「軍事教育の誤まれる点を指摘し過般小樽高商に起つた軍事教育想定問題につき学校当局と会見の内容を発表して極端に学校当局を攻撃」した。数百名の聴衆中には社研会員と目される高商の学生数十名が一同となっており(『小樽新聞』二五年一〇月二五日付)、学校当局との交渉経過に注目したと思われる。『北海タイムス』の報道に加え、この講演会で軍教事件は小樽市民に広く知られることとなった。

二二日に学生社会科学連合会の学生が小樽高商当局に送った「糾弾書」には、「平和のため人類文化の促進のための教育を支ふべき貴校当局がかゝる殺人的教育を行はしめたることに対し与論の喚起を図ると共に飽くまで貴校当局の責任を問ふ」とあり、さらに「今回貴校軍事教官によつて立案されし想定は貴校当局の意思なりや」「貴校当局の

軍事教育に対する今後の方針如何」（『無産者新聞』号外、一〇月二六日付）など四項目について、回答を求めている。しかし、学校側はこれを完全に無視した。

3 「少壮教授」の動静

軍教事件の惹起に対して、二一日の伴校長の対応や「抗議質問書」への二七日付「回答」にみられるように、学校当局は「不逞鮮人」という語句を用いた点への「遺憾の意」表明にとどめ、「想定」全体の不当性、軍事教練の中止、責任者への措置などについては、抗議を受けつけないという強硬な姿勢をとった。それは、これから展開される学内の社会科学研究会の抗議活動に対する強権的な抑圧措置に連動していくが、事件の惹起直後の段階では学校内にも別の動きが存在していた。一七日の抗議で中村首席教授らは「全想定の不穏不公正なること」を認め、さらに「社会の疑惑を招き、朝鮮人に不安の感を与へ其の激怒を誘発せしめたることに就き其の責を負ふ」という言質をあたえていた可能性が高い。それは猛烈な抗議に押されてという側面だけでなく、学校内に存在する本格的な「軍事教練」実施に対する批判的な見解を背景にしていたのではないか。

二三日付の「抗議質問書」では、こうした二つの見解があることを鋭く見抜き、「全想定の不穏不公正」についての「学校当局の一致せる意見如何」と問うた。これに関しては、二三日付の『北海タイムス』が興味深い記事を載せている。「学校側に於て本問題の発生するや非常な狼狽をなし廿一日緊急教授会を催し本問題の前後策について協議を行」ったというのである。午前中の抗議団と校長との会見後の、午後の開催であろう。

端なくも論議沸騰を見るに至つた抑々該想定を決定するに先立ち多数教授は不逞鮮人及び無政府主義等の文字を挿入するは不穏当なるを以て撤回を主張せし之に対し一部少壮教授連は仮想なるが故に何等不穏ならずとして反対し之を作製配布したのが斯る問題惹起の因をなした

やや時間経過が混乱しているが、おおよそ「多数教授」が「想定」そのものの撤回を求める一方で、「少壮教授連」はそれに反対し、文書として「作製配布」したことが拙かったという立場をとったようである。この前後の小樽高商の教員のポジションとして、前者の代表格は南亮三郎（商業学・経済学、人口論）、後者の代表格は苔米地英俊（英語・商業英語、伴校長の次の校長）であろう。高松勤は、もちろん前者だが、社会科学研究会の後ろ盾ということもあり、あまり表だった発言はしなかったのではあるまいか。

この記事は最後に「本問題の責任上或は一二教授の辞職を見るに至るやも測り難い形勢に在る」と観測している。当初の時点で学校内に「全想定の不穏不公正」について肯定する意見があったこと、そして「多数教授」対「少壮教授連」という対立があり、「一二教授の辞職」も取沙汰されたことは確かであろう。さらに二五日付の『北海タイムス』は学校内取材した結果を報じる。まず、「同想定発表に際しては教授の殆ど全部は予知らず新聞に発表されて始めて内容を知つた様な」状況だが、「一般にその不穏当と非常識を認め殊に少壮教授間には不評判を招いて居る」という。ここで、「少壮教授」の使い方は二三日付記事と逆転している。二三日付が「少数教授」的な意味合いだったが、二五日付では文字通りの若手教授というニュアンスだろう。

しかし、これらの若手の「少壮教授」も「この事に関して多く語るを欲せず軍事教育の可否等の根本問題に触れては宜しく察す可し的な態度を取つて居る」とする（それを「経済学、社会問題等を専攻して人々だけに無理のない事」と皮肉るが、ここに南亮三郎が含まれていることは間違いない）。すでに二一日の抗議団との会見で伴校長のといった強硬姿勢は学校内では知られていたはずであり、同日の緊急教授会でも校長の意向表明や指示があったことが考えられる。校長の対応に公然と反する言動はとれなくなり、新聞記者らに対しても口が重くなってきたのである。この「少壮教授」の腰砕けの態度は、手嶋恒二郎が後年の回想のなかで語る思い——「当時の小樽高商には、殊のほか数多くの自ラリベラリストをもって任ずる教官がおったというわけであるが、あの事件の処分に関連して示したその態度というものは、どれもこれも、つまり似而非という形容詞をつけなければならない体のものであった」（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）——と照応する。

二五日付の『北海タイムス』記事は、さらに三つのことも報じている。一つは鈴木少佐の動静で、「同問題を大した意に介する模様なく平常通り授業を続けて居」り、陸軍当局や第七師団からも「未だ何等の通知に接しない由」という。また、教務部主事の村瀬玄の「教務主任としての責任は負ふ」という発言や、中村首席教授の「今回の問題発生に対し学校当局の不注意を遺憾とし各方面より来る抗議に対しては学校として答ふ可き筋の者は出来得る限り弁明

をなす方針である」という、伴校長に比べて柔軟な発言を載せる。二三日付の「一二教授の辞職」とは、おそらく村瀬と中村を想定していたことがわかる。しかし、学校側としては、また文部省としても、「一二教授の辞職」は「想定の不穏不公正」を認めることにつながるため、容認できるものではなかった。村瀬は翌二六年四月に東京商大に転任するが、この「教務主任としての責任」との関係は不明である。一〇年後、伴校長の交代に際し、中村は首席教授であったにもかかわらず勇退を迫られ、新校長に苦米地が就任することになるが、その遠因の一つにこの軍教事件が関わっていることも考えられる。

もう一つは、学生の動静で、「校内学生の同問題に対する態度は至極穏健であり渦中に入る様な形跡の何等認められない」という。それは、野外演習が実質的に「郊外遠足」だったためであり、鈴木少佐も「学生間に非常に好感」を与えているためである。二五日段階では社研学生が動き始めてはいたものの、一般学生はまだ平静だったと推測される。「経緯」でも結びの部分で「本事件発生後学校職員及生徒間に何等動揺の形跡を認めず」とするが、半分は実態を隠し、半分は当たっているといえる。

伴校長が「軍事教育の目的は団体教練に在り」として抗議を受けつけない強硬姿勢をとり、学校内の異論を封殺したのは、社会的に大きな議論を呼んでいた「軍事教練」の本格的な開始まもなくの時点で、反対運動を活気づけるような謝罪や譲歩をするわけにはいかない、という決意だった。それは文部省の指示を待つまでもない判断と対応であった。当然ながら文部省からの懲罰もあったはずで、後述するような学生社会科学連合会の抗議を受けて、文部省は小樽高商に「真相の報告」を求めてきた。これに対して小樽高商では二一日の抗議団との交渉までの経過をまとめ、文部省に報告している(二九日付の『北海タイムス』に掲載されるほか、後日、『緑丘』第六号にも「経緯」と題して掲載される)。

折から北海道の視察に訪れた文部省の専門学務局長栗屋謙は、急速二八日に小樽高商を視察するとともに、軍教事件の経過や対応ぶりを聴取した。二七日付の『北海タイムス』は「大分新聞などでは騒いでゐる様ですが別にそうたいした問題でもないではありませんかもつともあの想定は少し穏当を欠いてゐる様ですがそれだからと云つて教練そのものまで非難するのはどうしたものぞう」という二六日の栗屋の談話を載せている。『東京日日新聞』(一〇月三〇日付)によれば、「今回の想定問題は可否をいふべきほどの重大事件ではないけれども全国の各学校で軍教が極めて無事に行はれつゝある際多少でも世間の誤解を招くやうなことは面白くないから将来充分に注意ありたい」という岡田文相の指示を伝えさせたという。小樽高商の「少し穏当を欠い」た想定は慎重さに欠けて叱責ものであるが、その後の抗議への対応は文部省にとっては妥当な、満足すべきものだった。

三 小樽高商軍教事件の展開

1 高商社会科学研究会の活動

一〇月一五日夜、境一雄が野外教練の「想定」の「軍事教育による学校の軍隊化、軍備化にして、教育上の一大問題」や「全無産階級、及び全朝鮮人の生命に関する大問題」を指摘すると、小樽高商社会科学研究会のメンバーもその重大性に気づいた。境によれば、斉藤磯吉らは「全学連に連絡をとって軍教反対闘争の全国的規模へのつながりを作って行った」(倉田前掲書)。これを受けて、二二日、学生社会科学連合会は小樽高商当局宛に要求書を送るが、高商社研との連携がとれていたわけではないようである。

二三日夜の小樽倶楽部での「農村社会問題講演会」に参加した高商生の一団が社研メンバーと思われるが、境らの抗議団と学校当局の交渉が断続的に続く二八日頃までは、社研としての抗議活動は控えていたか、あるいは水面下での活動に限っていたと推測される。休学中の斉藤磯吉は校内での面立った行動は避けたとと思われる。

学校当局の対応ぶりを注視しつつ、その強硬姿勢がはっきりすると、責任追及の行動に踏み出した。二九日、学生有志が伴校長に会見して反省を迫るとともに、「決議書」と「要求書」を手渡し、翌三〇日には「檄」を配布するが(新聞社にもこれらの文書を積極的に提供して、世論の喚起を図った)、そうした文書の起草・印刷の作業は数日前から開始されていただろう。二九日の抗議の人数は『北海タイムス』(一〇月三一日付)では「各学級学生代表二十数名」、『小樽新聞』(十一月三日付)では「十名」とくいちがっているが、これらには学生の署名があった。

決議書

今回我校ニ突発シタル所謂軍教想定問題ニ関シ学友ノ意嚮、大体次ノ三アルヲ知ル

01該想定ヲ不穩当ナリトシテ批難スルモノ

02学校当局ノ行ヒタルトコロ總テ正善ナリトシ（一）ノ考ヲ抱ク者ニ対シ「國賊」呼ハリヲナスモノ

03吾不関焉ノ態度ヲトルモノ

吾等ハ勿論（一）ノ部類ニ屬ス。而シテ今ヤ学校当局モ亦此ノ立場ヲ採ラルルコトト信ズ吾等ハ学校ニ飽ク迄、神聖ナル教育機関タルベキヲ確信スルガ故ニ該想定問題ニ関シ学校当局当然ノ責務ヨリ別紙要求箇条ノ実行ヲ約束セラレンコトヲ求ム

大正十四年十月二十九日

小樽高商学生有志

伴校長殿

要求書

- （一）吾等ハ関東大震災当時ノ自警団及靈兵隊ノ狂態ヲ真似タルガ如キ軍事教育野外演習想定ヲ以テ「緑ヶ丘」ノ人道ト正義ヲ汚辱シタル学校当局ガ潔ク、ソノ責任ヲ明ラカニセラレンコトヲ要求ス
- （二）吾等ハ学校当局ガアラユル手段ヲ尽シテ該想定ノ不穩ナル所以ヲ学生全体ニ明示シ学生ヲシテ徹底的ニ其ノ非ヲ悟ラシムルコトヲ要求ス、曖昧模糊ニ葬リ去ラントスルガ如キ態度ニ反対スル
- （三）吾等ハ今回ノ如キ日本国民ヲ仮想敵トスル軍事教育ヲ今後絶対ニ施サル、コトナキヲ要求ス

大正十四年十月二十九日

軍教事件・社研の「激」

小樽高商学生有志

伴校長殿

（以上、『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）

「決議書」では三様の「学友ノ意嚮」を掲げる。社研メンバーが事件惹起以来の学校内の世論の動向を観察した結果といえる。これらの起草にあたったのは社研メンバーのうち黒田力造と手嶋恒二郎らで、「それにみんなの知恵を加えて出来上がった」。「要求書」の「曖昧模糊ニ葬リ去ラントスルガ如キ態度ニ反対スル」の部分は、斎藤磯吉らの主張によって挿入されたものとい

う（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）。新聞報道によれば、伴校長は「中村教頭と交々時期が総てを解決すべしと応答」（『北海タイムス』一〇月三一日付）したほか、「学生としてとる可からざる行動であると訓戒」（『小樽新聞』一一月三日付）したという。すでに七月の学連大会参加をめぐり、学校内に社研が存在するらしいことを知った校長らは、いよいよ社研への警戒を深めつつあったといえよう。

一〇月二八日午後の学校との応酬を区切りに、小樽総労働組合などが市民に向けた軍教反対運動に転じる一方で、学校内での反対運動の主役は社会科学研究会に代わった。二九日、伴校長との会見でにべもなく一蹴されると、社研は「檄」の配布を断行するのである。「小樽高商学生有志」の名で活字印刷された「檄」は三〇日に「学生の帰校の折配布」（『小樽新聞』一一月三日付）され、また三十一日の「新設グラウンド竣工記念祝賀大運動会」（会場は小樽公園グラウンド）の際にも配られた。同時に学生社会科学連合会や各大学・高校などの社会科学研究会に郵送された。三一日付の『北海タイムス』は全文を掲載する。高橋（石田）眞平によれば起草者は黒田力造である（『小樽高商時代』

大正十四年十月二十九日
小樽高商学生有志
伴校長殿
軍事教育に關し
無批判の看過は良き不具者たることを強調し
全國の學生諸君に檄す！
本十五日午後、本校で存心と軍事教育野演習想定が、大正十四年東大震災
の際の自警團及び靈兵隊の狂態を真似たるが如き軍事教育野外演習想定を以て「緑ヶ丘」
ノ人道ト正義ヲ汚辱シタル学校當局ガ潔ク、ソノ責任ヲ明ラカニセラレンコトヲ要求ス
（一）吾等ハ関東大震災当時ノ自警團及靈兵隊ノ狂態ヲ真似タルガ如キ軍事教育野外演習想定ヲ以テ「緑ヶ丘」
ノ人道ト正義ヲ汚辱シタル学校當局ガ潔ク、ソノ責任ヲ明ラカニセラレンコトヲ要求ス
（二）吾等ハ学校當局ガアラユル手段ヲ尽シテ該想定ノ不穩ナル所以ヲ学生全体ニ明示シ学生ヲシテ徹底的ニ其
ノ非ヲ悟ラシムルコトヲ要求ス、曖昧模糊ニ葬リ去ラントスルガ如キ態度ニ反対スル
（三）吾等ハ今回ノ如キ日本國民ヲ仮想敵トスル軍事教育ヲ今後絶対ニ施サル、コトナキヲ要求ス
大正十四年十月二十九日
小樽高商學生有志

『いしだゼミの友』三〇)。

「軍事教育に関し 無批判の看過は良心的不具者たることを強調し 全国の学生諸君に檄す！」という見出しについて、「吾々は学校当局のこの暴虐に且、怒り且、悲しみ、翻然として当局が進んで自決するところあるを待つた。然るに何ぞや。この外部からの抗議を徒らにケチをつけるものと解したるか、質問書に対し鑑袖一触の態度を示して之を一蹴した。吾等は茲に於て外部からの糾弾に策応して、内部から猛然を積極的反対運動を起し之と徹底して戦はざるを得なくなつた」と、学校当局との全面的対決をなすに至った経緯を述べる。「吾々真理の追求者たるべき青年学徒に、敢て銃剣を把らせたことの何の爲めであるかを知つて、全身の血の逆流するを覚へる」とまで、高揚している。そして、次のように呼びかけるのである。

諸君、諸君は之れに盲従するか？

否！ 否！ 否！ 吾々はお互にかかる軍事教育を受けることの如何に良心に忍びざるところであり、如何に吾々の心を憤激せしめ、之と徹底的に抗争し闘撃することを誓はしめたか、を知つてゐる。吾々はお互の熱愛する学園に、自由と正義が吐血して倒れてゐるのを見て尚、起たざる程のお上品な偽善者ではないことを知つてゐる。そして吾々の胸から胸へ流れる血汐が、吾々に何を叫ぶべきかを教へる。

軍事教育を倒せ！

無批判の看過は良心的不具者たることを意味する。

全国の学生諸君、内部から軍教に対する積極的反対運動を起せ！

これは、この前後の学生運動のなかで発せられた宣言や声明とはやや論調を異にする。軍教反対闘争に限っても、一〇月二二日付の学連「決議文」や一一月九日付の立教・早稲田・帝大新聞連名の「共同宣言」が左翼的な言辞を連ねて常套的な論理の運びで書かれるのに対して（たとえば「共同宣言」の「学校をして軍隊化し軍閥の駆使に甘んずる事を許容せんか、大学の使命は全く蹂躪せられ、学問の独立、研究の自由は永遠にその姿を消し一切の教育機関をあげて軍国主義的色彩の下に抹殺し去られるであろう」の一節など〔『学生社会運動史』〕）、この「檄」は自らの言葉と思想で書かれていといえようか。

そのように判断するのは、「お互の熱愛する学園に、自由と正義が吐血して倒れてゐるのを見て」や「妥協は墮落である。偷安は裏切りである」などの部分である。前者は「学問の自由、研究の自由」擁護という意味合い以上に、小樽高商＝「緑丘」の学園に対する「熱愛」からの非難である。それは「要求書」にある「軍事教育野外演習想定ヲ以テ「緑ヶ丘」ノ人道ト正義ヲ汚辱シタル学校当局」という発想と照応する。後者は社会科学的な認識というより、文学的な表現であり、学生運動の文章としては異色である。

おそらく創設半年あまりの間、社会科学文献の読書会程度の経験にとどまっていた小樽高商社研は、軍教事件惹起を機に一気に実践運動に踏み込むことになった。それゆえ自らの手持ちの論理と表現を最大限に発揮した結果が、このような「檄」や「要求書」となった。荒削りながら「全国の学生諸君に檄す！」という強い思いがほとばしったものとなっており、それは確実に各地の学生や労働者・朝鮮人に伝わった。

「檄」配布後の高商社研の学内での動きについては、すぐ後述する事件沈静化のための「穏健派」学生の攻勢や、学校当局からの事情聴取などの圧迫によって守勢に回ったと思われる。一一月三日の小樽倶楽部における批判演説会には聴衆として参加したはずだが、演壇には立っていない。ただし、一一月六日付の『小樽新聞』が、社研会員は「全校生の態度の案外強固なるに依り漸く自責の念に打たれたる如く其後不穩の挙なく平静に就学し居る有様」と報じるのは不正確である。

一方で、学連や大学・高校の各社研から「激励の電報が寄せられ、また本校の社会科学研究会の中心メンバーであった斉藤磯吉氏が上京してこの連合会の会議に出席するなどの動き」（『緑丘五十年史』）があった。一〇月二九日に文部省に押しかけた学連の抗議団のなかには北海道の代表も含まれていたが、あるいはここに斉藤が加わっていたかもしれない。

しかし、学校側の弾圧が一一月一三日に下されると、小樽高商社会科学研究会は瓦解を余儀なくされる。

2 高商学生の反応

一一月二日付の『小樽新聞』は「教権下の学生の純情が燃え立つた 軍教想定問題の渦は停るところを知らぬ」と

いう見出しで、社研の「決議書」「要求書」を載せるとともに、次のように学生の反応ぶりを報じている。ここは「決議書」の観測に近い。

高商側学生の態度如何と見るに三年生二年生の大多数は愛校の精神よりして学校当局に反省を求める有様なるも一部は軍事想定問題を正当事とし又学校当局に反省を求むる物を以て「国賊」呼ばれりをなし一年の大多数は表面吾不関焉の態度なるも裏面は三年生に好意を寄せ居るといふ風

一〇月三十一日付の『北海タイムス』によれば、抗議団の質問に対する高商当局の回答を「曖昧不徹底」として、「各学級通じて学生達は此の学校当局の態度を非難し猛然として内部より積極的に反対運動を起すに至」ったという。さらに、十一月三日付の同紙は、「母校のために学生連起つ 校内は蜂の巣の様」と題して、「愛校精神の発露と母校の対面のために再三学校当局の反省を求め」る学生と、「軍事想定は何等不穩なるものに非ず正当事なりとて反対の叫びを挙げ」る「二年生の一部」の学生とが対立し、「両者間の睨み合から或は直接行動に出んとする不穩なる情勢」であると報じる。

一方、三日付の『小樽新聞』は「大部分穩健派」という見出しで、社研の活動を「煽動的口吻」とみなし、「一般の学生はテンデ耳を藉さざる有様」と、前日の記事とほぼ正反対の見方を示す。そして、三〇日の「檄」配布に反発した「学校擁護派とも目す可き穩健なる大多数の学生は彼等の輕挙盲動に憤慨し之に対抗し鎮圧す可く寄々協議中」とする。

この三日付『小樽新聞』と符合するのが、『緑丘』第六号掲載の編集部の手になる「学生多数声明書に署名し」の文章である。これによれば、配布された社研の「檄」、および『北海タイムス』などで「校内は蜂の巣の様」と報じられたことを受けて、これらを「看過して世人をして徒らに誤信せしむるに忍びず」と判断した学生たちは、二日から三日にかけて「該問題に対しては絶対に超然たる態度を持ち冷静これを貫き穩健着実に学業に精勵し居る事実を声明」する署名をクラスごとに集め、「殆ど全校生挙げてこれに賛同」することになり、その結果を新聞社に伝えて訂正を求めた。先の三日付の『小樽新聞』はこの動きを伝えるものであり、さらに五日付の紙面では「小樽高商生の反動運動 多数の穩健派誤解を闡明す」とする。それによれば、「約二十名程の非難派のみ署名せざる」状況であった。こうした『小樽新聞』の報道を受けて、ある読者は「待つていましたとばかりに騒ぎ出そうとした主義者の叫びに対して、当の高商生諸君の自重さ」を称賛する投書を寄せる（十一月一〇日付）。ただし、もう一方の『北海タイムス』は「穩健派」学生の動きを報じていない。

大和田正彦によれば、「各クラス毎に右派に属する者を数名選び、その人々が学校当局へ諒解を得て密かに」学生大会を開催し、署名を集め、社研を強く非難したという（「軍教事件の思い出」）。渡辺惣蔵『北海道社会運動史』も、「狼狽した学校当局は、十一月二日各クラスを動かして学校信任の署名運動を起して学生の切崩しをはじめ」とする。「穩健派」のなかには、学校当局とつながった動きもあったと思われる。署名をボイコットした大和田の証言は具体的で、社研の寺田・黒田・斉藤が学生大会の壇上に立って「静かに、しかも理路を尽して自分達の行動の間違ひのないことを説明した」という。

「穩健派」学生の核の一つとなったのは大平善悟・中野清一・西川正巳・西野嘉一郎らの「弁論部」部員で、「校内の問題は校内で解決すべきだ」という主張からだった（西野「思い出の記」『緑丘五十年史』）。もう一つの核となった編集部（新聞部）の大塚武雄は、「何よりも学園内が決して騒然としていない事だけでも天下に声明する必要がある」という立場で行動したという（大塚『『緑丘』新聞創刊のころ」、同前）。「学校は事実上数日間、休校となってしまった」という西野と、「学内は平穩に異常なく授業が続けられている」という大塚の証言はともに「穩健派」に属しながらも対極にあるが、おそらく一〇月末から一月初めにかけて緊迫・騒然とした雰囲気が学校内に満ちていたのではないだろうか。大和田正彦は「学校には憲兵や刑事が出入りし、労働団体の人らしい者も校舎の陰に付んでいるなど、異常な空気の中に我々は登校していた」（「軍教事件の思い出」）と回想している。

学生たちは街の演説会にも出かけていった。十一月三日、小樽倶楽部で開催された軍教批判演説会を埋めた四五〇名の入場者の「大半」は高商の学生だった。第一番目の講演者である政治研究会小樽支部の村山三郎が「政府は吾々無産者に挑戦すべく銃口を向けつゝあり」と述べると、「学生間より猛烈なる野次が囂々として飛び弁士は壇上に十数分間の立往生の醜態を演じた」という。野外演習は実質的には「郊外遠足」で、ピクニック気分が横溢し、鈴木少佐への好感度もあったため、「政府は吾々無産者に挑戦すべく銃口を向けつゝあり」という捉え方は、当の学生らには教条的で実感に乏しいものであったろう。次の講演者、政治研究会札幌支部の木田茂晴も「論旨不徹底のため再び

聴衆より野次を浴び」た。

しかし、学生を中心とする聴衆は「軍事教練」を支持するものでもなかった。境一雄が「小樽高商軍教想定」の抗議と経過と批判」と題して「自由と真理の探求者たる学生諸君は飽まで此の不合理極まる彼等に対抗し之を徹底的に糾弾されんことを」と述べると、「満場喝采」となった。北海タイムス社の一記者は、「木田村山の二人が野次り倒されたのは当然である傾聴に値する弁士の言については傾聴を惜まなかつた高商生の態度」を「紳士的」と称賛する(以上、十一月五日付『北海タイムス』)。

前述のように、三日には学校で「該問題に対しては絶対に超然たる態度を持し冷静これを貫き穩健着実に學業に精勵し居る」という声明に署名した同じ学生の多くが、おそらくその日の夜の批判演説会に参加し、野次と喝采を浴びせたと思われる。この状況をどのようにみるべきだろうか。まず、「学内に流れていた空気はとなると、どうしてあかも桁はずれて、いわゆる「国家主義」的なものからは遠いものであったのだろうか」という手嶋の証言にあるような、自由主義的な「空気」が学校内にある程度充満していたというべきであろう。社研の「要求書」中にある「緑ヶ丘ノ人道ト正義」とは、社研の独善的な認識ではなく、広く「緑丘精神」として共有・共感されていたといつてよいのではない。

それを前提としつつも、実際に行われた野外教練は遠足気分程度のものであったし、鈴木少佐の教練ぶりも問題視するほどのことはなかったにもかかわらず、小樽高商全体が「想定」に猛反発して沸騰状態にあると社会的にみられることは心外であり、「穩健着実に學業に精勵し居る」ことだけは理解してほしいと考える。しかし、今回の「想定」自体は「不穩不公正」のものである。このように、一般の学生の多くは、「想定」を「緑ヶ丘ノ人道ト正義」に反するものとみなしつつ、学校全体が軍教反対で騒然となっているという誤解を社会に与えることに反対したと考えられる。

『緑丘』第六号は一面巻頭の「大正十四年を送る」という論説の第三項目に「想定文事件」を取り上げる。高商社研の行動に批判的な編集部(新聞部)の手になるだけに、「余りに宣伝に奔走し又實際運動に興味を持ち過ぎたのではあるまいか。自由研究、論究批判の域を脱して外形的運動に自らの使命を忘れたのではないか」と指摘する。と同時に「公平なる立場」からみて想定は「常識を有する程の者は明かに之が正否を判断し得る」とし、「学生の思想研究を危険視し之を恐るゝものある」とみることが誤解だとする視点ももっている。これが、大勢となった「穩健派」の見解を代表するものだろう。

したがって弁論部を中心とする「校内の問題は校内で解決すべきだ」という主張が、大半の学生の共感を呼ぶのは自然だった。社研の行動に対して「国賊」視するグループもいたが、それは少数派だった。弁論部員の西野嘉一郎は「唯物論にはなじめなかった」が、高松勤の示唆でウィリアム・モリスに導かれ、卒論とする。また、大平善悟も高松に傾倒し、大きな影響を受けていたことは、高松への追悼——「理想主義の理想を高く説き給ひし若き先生に吾は愛されき」「貧しさに耐へつつ人に尽されし先生の道は正しくありき」(大平「高松勤先生を弔ふ」『緑丘』第一四五号、一九四一年三月二五日付)——にうかがえる。社会科学研究会と弁論部、すなわち「マルクス派とカント派とを和やかに並存させるか、いとも仲良く競争させ」(中野清一「多喜二さんの執念」)ていた。

ただし、急速に学校内の主導権を握った「紳士的」な「穩健派」にしても、弱さを内包していた。後述するように、小樽高商ではこの軍教事件にともなう緊迫化にもかかわらず(というよりは緊迫化ゆえに平常を保つために)、おそらく予定通りのスケジュールで次の野外演習を実施するが、それに学生は「軍事教練」に違和感を持ちつつも淡々と参加していくのである。また、社研メンバーに対する学校側の停学などの処分に異論や批判を投げかけることもなかった。『緑丘』第六号は、「軍教想定問題の真相」の最後に「物の両面」という小文を掲げ、編集部としての意地をみせるが、その末尾は次のような市民の苦言となっている。一部の学生にはそれは痛恨事として認識されていただろう。

△学生一同絶対に不穩の行動に出でず學業に精進すとの声明を為したのは流石に立派な態度だ。そして生徒の団結の鞏固を物語る。

△しかし処罰された生徒の減刑運動をしなかつたのは実に惜しい。「行為を憎くんでも其人を憎まず」同僚の爲めに団結しても減刑運動する丈の友情があつて欲しかつたと或市民が残念がる。

そして、学生のなかには「吾不関焉ノ態度ヲトルモノ」もいた。たとえば、この軍教事件の渦中の一〇月三〇日、高商では新設グラウンドの祝賀運動会を開くが、その準備に奔走する学生もその一群と数えられるであろう。三十一日付の『北海タイムス』は、ある卒業生に、「学生諸君が自校の不祥事を外に或は女学生を捕へて売店の切符を売り付け

窮地に陥った社研メンバーは、協議のうえ、「みんなそれぞれの事情があるだろうから、処分をうけるものが、志願することにして」と決め、高橋によれば一名が名乗り出たという。高橋・手嶋・山本安次郎で（「小樽高商時代」、黒田力造も含まれていたはずだが、斉藤磯吉については不明である（十一月一日付の『小樽新聞』には「斉藤外十五名」が無期停学を命ぜられたとある）。学校側が一日に言い渡した処分者は、新聞の報道によれば、無期停学一四名と譴責一名である。その理由は、「今次の反軍教運動に際し外部の思想団体と策動し学生として不謹慎極まる態度に出で教訓に悖る」（『北海タイムス』十一月一日付）というものであった。『緑丘』第六号の編集部の説明では、「檄」に「羅列されたる矯激なる語句と態度の穩健を欠きたる事等が嚴乎たる校則に触れ」たためとする。校則第二七条が



適用された。なお、文部省学生部『学生思想運動の沿革』(一九三一年三月)には無期停学一六名とある。

手嶋は「我々がひとかたまりになって、あの校長室で時の校長伴さんから宣告をうけた日は、北海道のことだからもう雪も大部に積っていた寒い日の夕暮だった」(『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』)と描写する。停学は自宅謹慎であり、「宣告あると同時に学校の措置を怨みつゝ同夜急行にて多くの同級生に見送られ其れく柵を纏めて帰郷の途に着き同夜の停車場は時ならぬ悲壮なシーンを展開した」という。これを報じた一一月一四日付の『北海タイムス』は、学校の措置を「余りに残酷」とし、「停学生に多少の非難あるにしても吾には個人的に非常に同情を寄せて」いるという、同級生の声を載せている。高橋も「停学組は一緒に小樽を去り、連絡船でも一緒だった。みんな一緒のときは凱旋將軍のように意気が昂揚する。しかし、独りになるとさすがにさびしく、泣けてくる。こっそり歎異抄を出して読む。なにかしらジーンと胸にこたえてくる」(「小樽高商時代」)と回想する。

この強硬な処分について、学生の同情が集まるほか(それ以上の具体的な救援活動はなかったが)、外部からの抗議もあつた。戦後の『緑丘』(第二〇九号、一九四九年二月一〇日付 渡辺『北海道社会運動史』より重引)は、「札幌の労働者団体はいきりたった。鈴木源重、木田茂晴氏等は直接に学校に刺を通じてその取消し方を要望してきた。

市井では処分反対市民演説会まで開かれようとしていた」と記している。しかし、学校当局はそれらを一切無視した。



1926年卒業アルバム

この措置について、一一月一五日付の『小樽新聞』が報じるところでは、文部省の武部欽一実業学務局長は「停学問題は初耳だ何もこちらで命令した訳でない、悪い学生が停学を食ふのは当然の事だ」と語ったという。だが、それは信じがたい。それを推測させるのは、伴校長のこの間の動向である。一一月一日付で文部省に「校長上京ノ義ニ付稟請」をおこなっている。一九日から一二日間の予定で、用件は「去ル十月十五日举行ノ野外演習想定問題ニ関シ報告ノ為メ」であった(稟請書の草案では「報告」のところが「陳情」となっていた)。この稟請前の段階で学校側は社研メンバーに対する処分内容を固めていたと推測され、それを教授会で決定し、学生たちに宣告した後、文部省に「報告」を持参する、という手筈を整えていたのだろう。文部省からは、処分宣告後の一七日付で許可が出され(以上、「秘文書綴」一九二五年度、小樽商大所蔵)、伴校長は予定通りに文部省に「報告」に出向いたはずである。処分の決定前に文部省と緊密な連絡をとっていたとみるべきだろう。

推測を逞しゅうすると、一月初旬頃、文部省が「断乎処分せよ、との通達」を小樽高商当局に出した際、その「報告」の期限を切り、学校側の決断を促した可能性がある。さらに、伴校長の持参した停学・譴責処分という内容の「報告」で飽きたらぬ文部省では、さらなる追加措置を求めたとも考えられる。首謀者と目された斉藤磯吉への措置と、社研の顧問格である高松勤に対する措置である。また、「想定」の立案者である鈴木少佐への対応、停学解除の時期や条件についても協議されたのではないだろうか。

処分宣告の約一か月後となる一二月一八日の教授会で「改悛の情著しきものあり」(『小樽新聞』二五年一二月一九日付)と判断して、黒田ら一四名の停学処分が解除された。なお、「今学校から問い合せのざんげ状を書いているんだ。思わずプーッと吹き出したくなるほどの真面目くさった、しほらしい文章だからこれから讀書しようというんだが、まあまあ一服」(『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』)という手嶋宛の黒田力造書簡にあるように、学校側は停学解除の条件として「改悛の情」を計る反省文の提出を義務づけたようだ。それでも黒田は「ざんげ状」を書くかわら、「インターナショナルの歴史」を学習しているように、「改悛の情」は偽装にすぎず、軍教反対の運動を展開したことに後悔の念は持っていない。手嶋も事件から五〇年を経て、なお「今日にいたっても、この私はその処分の妥当性についてこれを認める気持には到底なり得ない」「学校当局の責任者の、甚だしい早とちりというものであった」(同前)と書く。

また、手嶋の回想によれば、「この謹慎中、我々の指導者であった斉藤磯吉氏は、首謀者と目されて有無を言わず放校になってしまった」。高橋は「あとで彼は、高松先生や南先生と相談の上、自発的に退学した」(「小樽高商時代『いしだゼミの友』)と書く。一二月二日付の黒田の手嶋宛書簡中の一節——「斉藤磯吉氏あくまでも気の毒だな。僕等が小樽にいるんならまた何とか運動の方法もあろう。しかしお互いに帰郷謹慎させられてはただ無念の涙とと

もに将来の奮闘を誓うばかりだ。見殺しにするようで実に心苦しい。良法もなきか？」——が、この退学問題に触れている。中央の学生社会科学連合会の会議に小樽高商社研を代表して出席したことなどが、停学処分以上にきびしい退学処分となった理由だろうか。そのもっとも強硬な主張者は苦米地英俊とされる。

斉藤の成績は一年目二三位（約一六〇名中）と優秀だったが、二年目に五七位（推定）と下がるのは、社会問題への関心を強め、社会科学文献の読破などに傾斜したからであろうか。三年目の二学期は休学しており（痔失が理由といわれる）、そのまま退学処分となった（「成績原簿」〔小樽商科大学所蔵〕なお、この「原簿」などに退学についての記述はない）。先の黒田書簡からみて、一二月下旬ころに処分が下されたと推測される。

斉藤と同クラス（三年甲組）であった黒田の場合をみると、一年目の成績は五〇位、二年目は二〇位と優秀の部に入る。三年の成績は最終的に「落第」と認定され、ここから「依願」退学を選択したと思われるが、その「落第」となった理由は、一学期の「商業英語」（苦米地英俊担当）の〇点（二学期は五五点）、二学期の「工業政策」（南亮三郎）の〇点（一学期は九〇点）により及第点に届かなかったためである。あえて〇点を取ったことは、教員に対する抗議が意識的になされたといつてよい。黒田の言動は苦米地との対立を生んだと推測される。二学期の「工業政策」の試験放棄は、おそらく軍教事件の収拾過程における南の言動に対する反発と考えられる（南は高松勤と並ぶ社研の指導者であったが、教授会などでは自らに累が及ぶのを恐れた発言をしたと推測）。

停学処分解除となった山本安次郎は、三年生になると『緑丘』第一〇号（二六年六月一〇日付）の巻頭に「新入生諸君へ」という文章を寄せる（続編が第一一号に掲載されたと思われるが、欠号）。もちろん軍教事件には触れないが、次の一節などは「生命の渴れ果てた観念の堆積墮落への媒介、窒息せしむる様な雰囲気」への抵抗をもって新入生へのメッセージとしていると読みとることができよう。



1926年卒業アルバム

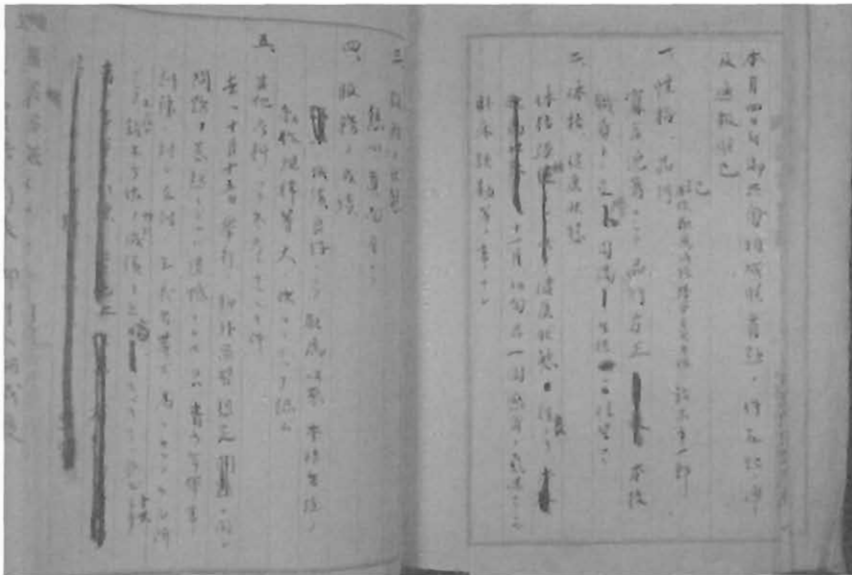
諸君は既に神秘的な英雄伝や、安っぽい恋愛小説に涙を流すセンチメンタルな文学青年であつてはならぬ。問題は現実を直視する事の外にあり得ない。神秘的な解釈や形而上学的な解釈ではなく、正しい科学的な方法論を以て現実の社会関係を分析し解剖する事である。我々の周囲には我々の良心を麻痺せしめ我々の眼を覆はんとする悪魔のヴェールが至る所に充満してゐる。しかもそれに対する不断の抗争と、鋭利な批判を怠る時忽ちにして我々を捕虜とし、公然と眼潰しを喰はすのである。実にあらゆる困難を排除して社会関係の真相を発見する事は、単なる机上の遊戯であつてはならない。空騒ぎの興味であつてもならない。それは我々の正義感が推進する生命それ自体の要求であるのだ。

「我々の良心を麻痺せしめ我々の眼を覆はんとする悪魔のヴェール」とは軍教事件を封殺した学校当局であり、それに「我々の正義感」を対峙させたとみることが飛躍しすぎだろうか。なお、二六年五月八日の新入生歓迎弁論大会で山本は「思想の社会的背景」という題で、手嶋恒二郎は「学校より社会へ」という題で論じている（『緑丘』第一〇号）。しかし、卒業に際し、山本は学校側からの企業への推薦が与えられず就職を断念し、進学（京都帝国大学経済学部）の道を選んだという（山本「未覚池塘春草夢」『呉女子短期大学紀要』第九号、一九九五年）。

高橋興平は、「停学中上京し、上野の図書館で朝八時から夜九時閉館まで専ら K.Marx, Das Kapital を勉強し、四ヶ月近くつづけた」（石田興平「経歴と著作目録」 滋賀大学経済学部編『石田興平教授還暦記念論文集』、一九六五年）。このとき、東大新人会の研究会に参加している。その後、胸部疾患のために休学していた小樽高商にはもどらず（二七年三月退学）、二八年三月に京都帝国大学経済学部に入學した（「経歴と著作目録」）。

『緑丘』第八号（二六年三月五日付）のコラムに、「高松教授辞任の噂さがある、吾々は、学生間にあれ程の人望と敬愛とを享けて居る同教授が、今更学生を捨てゝ去らるゝ事を信じ得ない、単なる噂さなることを祈る」という記事が載る。軍教事件の動揺は収束したもの、その余波は社研の顧問格であった高松を襲いつつあることがわかる。高松自身が社研メンバーへの停学・退学処分に責任を感じて身の処し方を考えていただろうし、苦米地らの強硬派による暗黙の責任追及も予測されるところである。それでも「あれ程の人望と敬愛とを享けて居る」という学生の評価が、高松に辞任を思いとどませたのではないか。

しかし、高松への圧迫は次第に強まり、ついに二七年度末での辞職となる（大倉高等商業学校への転任）。『緑丘』



第一三号(二六年一二月一五日付)の「緑丘ゴシツプ」には、「予て問題の高松教授の辞職実現を見る如し。今にして吾人何をか言はむ、只惜別の情を披瀝する耳。門弟の犠牲者は南洲に終らず。願くば師よ顕在なれ」とある。同第一四号(二七年一月一五日付)には、「御転任の噂ある高松教授 近日発表か」とあり、「先年末以来授業は各学年共休講となつて居る」という。ここでも「同教授は常々生徒の信望厚く」とされる。

この高松の辞職と同時期に、鈴木少佐も二年の任期を終えて転任する。

ということ「配属将校勤務成績通報」1925年『秘文書綴』の学生への

は、鈴木への処分は何もなかったことになる。社研関係停学処分を報じた一月一四日付の『北海タイムス』は、

最後に「此の多くの犠牲者を出した学校当局が想定立案の責任者に対し如何なる態度に出ざるや」と観測していたが、責任は不問に付されたのである。すでに一二月九日付の第七師団宛の「配属将校勤務成績」の「服務ノ状態」「服務ノ成績」は引用したが、それにつづく「其他考科ニツキ参考トナルベキ件」は、次のような記述となっている(「秘文書綴」一九二五年度)。

去ル十月十五日举行ノ野外演習ニ関シ問題ヲ惹起シタルハ遺憾ナレドモ青少年軍事訓練ニ対シ反対ノ主義者ガ為ニセントセシ所ニシテ鈴木少佐ノ性格成績ヲ云為スベキモノニ非ズ

青少年軍事訓練ノ実施上効果ヲ有効タラシメ将来ノ参考資料ヲ得タルモノナリト思惟ス

最後の一文は傍線が引かれ、削除されている。ここにも学校当局の「鎧袖一触的態度」は貫徹しており、「青少年軍事訓練」への批判は封殺されている。軍教反対運動は「反対ノ主義者ガ為ニセントセシ所」と一蹴され、「人種の問題」「教育上の一大問題」というような認識を一切拒否している。

したがって、鈴木少佐に対する信頼は厚く、「軍事教練」は予定通りに実施される。むしろ「軍事教練」を予定通りに実施することで、反対運動の影響を極力抑えようとする意図があったはずである。通常の教練のほかにも、まだ社研学生への処分も下らない一月一〇日(五日の予定が、降雪のため延期)、二年・三年生による野外演習が実施された。『緑丘』第五号(二五年十一月一六日付)が報じる「想定は簡単だが 内容の充実した発火演習」という記事中には、「背囊を負ひ佩剣してズラリと校庭に整列して見ると軍教反対などどこへやらなかなか棄て難い所がある」という一節がある。「戦の火蓋は切られ銃声天狗山を震撼し」という訓練が展開されるが、その後の「テント露営と炊餐」こそ学生の楽しみとするところだった。軍教反対運動のさなかではあったが、大半の学生はこれを深刻に捉えていなかったといえよう。一二月一五日には一年生の野外演習もおこなわれ、その交戦の状況は「天狗風の中に殷々たる砲撃の物凄き」と描写された(『緑丘』第六号)。

そして、翌二六年一月二七日、第七師団による「軍教査閲」が実施された。「一年級各個教練及小隊密集教練、二年級各個教練、及部隊教練、三年級各個教練部隊教練陣中勤務及筆記作業」で、査閲官の久木村少将は「些少の欠点は有すと雖も成績頗る良好」と評価した。そのうえで、「本校は量に想定事件ありて、社会より疑惑の念を抱かれ居るも、今回の査閲成績が其の疑惑を一掃せる」と述べた(『緑丘』第八号)。配属将校の鈴木少佐の勤務成績も満足すべきものとされた。なお、『緑丘』編輯部は、この査閲に対して「当局が寛大なる方針に出たる事は策を得たるもの」と歓迎する。それは「徒らに反対論者の憤怨を新たにする如き峻烈なる手段は、軍教本来の目的遂行上、当然避けられるべきであつた」からである。学校当局も、陸軍当局も、この査閲実施に緊張していたことがわかる。

この項の最後に、伴校長に対するある評をとりあげる。伴に対する学内外の一般的な評価は、その退任時(一九三五年四月)の『緑丘』(第八七号、五月一五日付)が掲げる「自由教育の慈父」である。これは、謹厳実直な初代渡辺龍聖校長と対比して、伴の第二代校長就任時以来、すでに確立した定評であつた。それゆえに軍教事件惹起における

小樽高商の対応ぶりは、学校内外から期待を込めて注目されたといえる。高商社研の「決議書」に「吾等ハ学校ニ飽ク迄、神聖ナル教育機関タルベキヲ確信スル」とあるのはその現れであり、それが裏切られると「檄」は「吾々は学校当局のこの暴虐に且、怒り且、悲しみ、翻然として当局が進んで自決するところあるを待った」と深い失望感の表明を辞さない。

一月三日の小樽倶楽部における想定批判演説会に関連して「軍教反対の叫びを聴て」（一月五日付）という記事を書いた『北海タイムス』の記者は、「吾等も亦伴校長の英断を望む」とする。あえてこのように書くのは、軍教事件に対する学校側の強硬姿勢に対して、「虚心と恬淡の装によつて無能を覆はふとして居るのではないか疑が市民より伴氏に向けられ出した」からである。この記者は、伴校長に対して「学者的良心の前への大胆な平伏」を求める。

伴校長から停学処分を受けた手嶋は、「老人たちの頑固さ」や「学校当局の責任者の、甚だしい早とちり」を生涯にわたって是認しない一方で、伴に対する個人的な感情としては「いかにも温和な顔に人間味あふれる個性を持たれたひと」と敬愛の念をもち、さらに小樽高商の「おおらかな、それでいていつも情熱をたたえて絶ゆることのない独特の校風」の源泉をそこに見出していた（『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）。後年、退学処分となった斉藤磯吉の復学を気にかけるなど、伴校長が軍教事件の犠牲者の行く末を心配しつづけていたことは確かである。それは「慈父」としての憂慮であり、「学者的良心の前」への忸怩たる思いとはいえ、校長としては軍教反対の声を無視・封殺し、社研関係者に停学・退学処分を下すことには躊躇しなかったといつてよい。そして、伴校長の強硬姿勢を支え、かつ慫慂したのは、「軍事教練」実施に邁進する文部省と陸軍省であった。

4 文部省・陸軍省の対応

文部省や陸軍省の事件惹起への最初の反応は、一月二〇日付の『東京日日新聞』の記事中にうかがえる。文部省の鈴置政務次官は常設外れの「困った問題が起こつた」とし、「この問題が大きくなる様なら将校の身分は陸軍省の方に属する事だから陸軍省に何とか警告しよう」と語る。『教育週報』第四二号（一月三十一日付）によると、鈴置は「陸軍では差支ないとしても、学校に於ては困る。事実を調査した上にて相当の考慮をなす」と述べたという。しかし、文部省が陸軍省に警告した形跡はなく、この談話もトーン・ダウンしてしまう。

一方、陸軍省の伊藤副官は「やや奇抜すぎる想定」としつつ、「学生の好む想定だ 問題にする必要ない」と擁護する（『北海タイムス』一月二〇日付）。この「学生の好む想定」という談話は、「軍事教練」の本質を吐露したも

のとして、その後の追及の対象となる。一月二二日（二一日とする史料もある）、学生社会科学連合会の松本篤一（東京帝大）ら約八〇名は文部省に抗議したが、岡田良平文相は面会せず、山道参与官が応対する。学連が求めた「要求書」に対する、後日の文部省の回答は「小樽高商の想定を妥当と認むるや 返答 遺憾の意を表す」「文部当局の今後軍教に対する方針如何 返答 従前と変りなし」「問題の教官に対する処置如何 返答 答弁の限りにあらず」というものであった。

二九日、学連代表者約五〇名に対応した鈴置政務次官の回答も「責任は負ふが如何なる形式で負ふかは言明の限りではない」などという要領をえないものであった（以上、学連関東連合会執行委員会「第三回通告」法政大学大原社会問題研究所所蔵「小樽軍教事件」ファイル所収）。『無産者新聞』第五号（一月一五日付）は、「二時間半に涉つて激論をかはしたが、文部当局は応接室の内外を数十名の警官を以て固め、会見が終るやその場から十数名の学生を日比谷署に検束させた」と報じる。「十数名の学生」の部分は不正確で、六名の検束である。このなかには慶応の野呂栄太郎も含まれていた。一月三日、学連は文部省に抗議の決議文を手渡した。

文部省の基本的な態度は、想定の不適切を認めつつも、「軍事教練」に対する批判や抗議は一切受け付けず、その実施を当然視するというものである。それは、伊東延吉秘書課長の次の談話がよく物語る（『日本労働年鑑』一九二六年版）。

文部当局は学校の問題に就てのみ責任を負ふ、軍事教育問題に就ては文陸両相の責任が相半してゐると思惟する、且つ小樽高商事件に対して又然り、尚当局は該想定中の不逞鮮人なる字句の使用のみは教官として不逞と認むるも全想定の主案の趣旨は不逞どころかむしろ当然と認むるが故に今後かゝる想定をする教官があつても問題ではない

二五年度の各学校の実施状況の報告を、文部省では「教練実施ノ結果ニ関スル件」にまとめている（二六年一月）

一日、前掲『学校教練』第一冊)。そこでは「学校教練ニ関スル紛擾事件ノ概要」として四件を取り上げ、三番目に「小樽高等商業学校ニ於ケル野外演習想定問題」が立項されるものの、その内容については記述がない。別の詳細な記述が予定されていたのかもしれない。他はいずれも中学校における「教練被服費用強制徴収問題」や「配属将校ノ身分上ノ行跡ニ関スル問題」であり、高等教育機関の場で、社会科学研究会が関与し、さらに大きな社会的な反響を呼んだ点において、文部省にとって小樽高商軍教事件は別格の重大性を有していたことを示そう。

二〇年代末に至り、学生運動の本格化に抗して文部省が抑圧取締体制を整備していくなかで、その中心となった学生部編纂の『第五十七帝国議会説明材料』(一九二九年一二月、『文部省思想統制関係資料集成』第一巻収録)の「学生思想問題ノ経過概説」中の記述には、二五年「十月小樽高商軍教教官ノ不当想定問題ヲ惹起シテ世論喧シカリシガ之ニ関シテ学聯一派ハ文相ニ反対決議文ヲ提出シ小樽学校当局ニ対シテモ糾弾書ヲ発送シタリ」とある。「世論喧シカリシ」などの表記にみられるように、「軍事教練」の本質が問われたことを無視し、矮小化してとらえるのは、「反対ノ主義者が為ニセントセシ所」とする小樽高商当局と同じである。

それでもやや後に学生運動の展開について正確な理解ができるようになると、小樽高商軍教事件への位置づけもはっきりとする。学生部『学生思想運動の沿革』(一九三一年六月、『文部省思想局思想調査資料集成』第一〇巻収録)では、経緯を詳細に述べたあとで、「この事件は十二月の京大事件に直接に関連をもつ点に於て注意すべきである。即ちかの同志社大学に於ける、狼火ハ上ル云々の不穏ビラはこの小樽高商事件に原因するのである」と指摘して、注意を喚起するのである。

小樽高商軍教事件への抗議は学校当局や文部省に向けられ、直接的に陸軍省や鈴木少佐を配属した第七師団に向くことはなかったが、「想定」が「軍事教練」の本質を暴露するものという見方に、陸軍省副官の「学生の好む想定だ」発言がさらに油を注ぐことになり、「軍事教練」反対の声は各地で高まった。それだけに軍教批判に包まれた小樽高商・小樽市には憲兵が監視の目を光らせていたことは十分に考えられるが、それをうかがわせる史料は見いだせない。

危機感を抱いた陸軍省が早い段階で、この軍教批判の高まりを抑えにかかったことを示すのが、十一月五日付で各師団参謀長宛に通牒された「学校教練反対運動ニ関スル件」(「大日記」甲輯 一九二五年 防衛研究所図書館所蔵)である。

学校教練ノ進捗二件ヒ其ノ施設ニ対スル思想団体等ノ反対運動モ漸ク沈静ニ歸シタル観有之候モ彼等ハ隠ニ好機ノ至ルヲ待チアルモノノ如ク会々小樽高等商業学校ニ於ケル野外演習想定ノ如キ問題ヲ捉ヘテ再反対運動ヲ開始シ当地方ニ於テモ是等ノ問題ヲ利用シテ教練振作施設ニ反対ノ氣勢ヲ煽ラムトスルカ如キ状態有之候ニ付テハ学校教練実施上ニ於テモ世ノ誤解非難ヲ招キ又ハ反対宣伝ノ口実ヲ与フルカ如キ事無キ様格段ノ注意ヲ要スルモノト存候ニ就テハ貴管(団)下学校配属将校ニ右ノ趣伝達相成度依命及通牒候也

そして、小樽高商の「想定」文と一〇月二八日の学連演説会までの反対運動の経過が付される(それは第七師団宛には除外。つまり、当該の第七師団には既知の情報であり、陸軍省や小樽高商当局と密接な連絡をとっていたことが予測される)。前半部は二四年以来の軍教反対運動を指し、それが沈静化したところに「再反対運動」が惹起したという認識であり、後半部で各地にそれが飛火しないように「格段ノ注意」と「学校教練」の慎重な実施を求めている。

一九二七年二月、陸軍次官は小樽高商軍教事件と並んで「岡山医科大学ノ査閲問題、岡山地方中等学校生徒ノ教練反対運動並明治専門学校ノ可否決定問題」が惹起し、それらは「何レモ些々タル問題」ながら、「社会ニ描キ出シタル波紋ハ、相当ニ大キカツタ様デアリマス」として、「徒ラニ乗ゼラレル様ナ口実ト、機会トヲ与ヘヌ心掛ケガ肝要」と注意を喚起した(『業務指針』)。「岡山医科大学ノ査閲問題」などについては不詳である。陸軍当局が、小樽高商に端を発した軍教反対事件への対応に追われていたことは確かである。

5 軍教事件の全国的反響

小樽高商軍教事件が社会運動史・教育史に名をとどめるのは、学校内での紛擾にとどまらず、市内・北海道内において、さらに各地・各方面にその波紋が大きく広がったからである。当の小樽には東京をはじめとして各地から支援者が入り込み、小樽からは東京の運動に関係者が乗り込み、運動の連携が図られた。

最初小樽市内で軍教問題が取り上げられたのは、前述のように、一〇月二三日に小樽倶楽部で開かれた日本農民組合主催の農村社会問題講演会だった。ここで司会役の境一雄が、高商当局との会見の経過などを述べた。その境は

「廿七日日本問題を提て上京」、森戸辰男や大山郁夫と「会見の上近く之等一行を相携へて来樽」、高商弾劾演説会の開催を計画していると報じられた（『北海タイムス』一〇月二八日付）。一方、「東京学生連盟及び東京各思想団体は愈々学校当局を糾弾すべく廿九日夜東京を出発し小樽に向つた」（同、一〇月三一日付）。大山や森戸の来樽はなかったが、布施辰治・山本懸蔵をはじめ、朝鮮人団体の代表者や労働運動・学連の関係者が小樽にやってきた。一一月三日、これらの人々と小樽の「抗議団」が共同戦線を組み、小樽倶楽部で高商軍教批判演説会が開かれた。政治研究会本部・関東地方評議会・朝鮮労働総同盟・朝鮮一月会・全国学生社会科学連合会・無産青年同盟・東京五大学雄弁連盟が名を連ねた（同・『小樽新聞』、一一月五日付）。

小樽高商軍教想定と経過と批判（小樽総労働組合境一雄）

我等は斯く考ふ（小樽政治研究会員村山三郎）

無産階級として見たる軍教問題（政治研究会札幌支部木田茂晴）

朝鮮人の立場から（朝鮮総同盟中央委員魚波）

学生の立場から（全国学生社会科学研究会朝倉菊雄）

軍閥陰謀と教育者の無能（関東地方評議会員本沢建蔵）

当初、布施辰治（政治研究会）のほか、韓林（朝鮮一月会）・松本篤一（学連）・山本懸蔵（関東地方評議会）・渡辺利太郎（無産青年同盟）の登壇が予定されていたが（『小樽新聞』一一月二日付）、実現しなかった。魚波が「不逞日本人は無きやと冒頭し鮮人の関東大震災に於ける状況を述べんとするや」、臨監の藤橋小樽警察署長から注意を受け、「更に現在の鮮人の労働状態を述べんとするや」、中止の命令を受けた（同、一一月五日付）。最後に境は中央各思想団体の激励電報を披露した。翌四日には、札幌の時計台でほぼ同じ演者による演説会が開かれた。学連からは朝倉菊雄（島木健作、東北帝大）のほか、後藤寿夫（林房雄、東京帝大）も来樽しているが、表面にはでなかった模様である。後藤は小樽高商社研メンバーの高橋興平らの下宿に泊り、「東大の新人会の研究の様子」（『小樽高商時代』『いしだゼミの友』三〇）などを話したという。

軍教事件が収束した二六年一月下旬、小樽在住の朝鮮人が「鮮人相互の親睦を計るを目的とし併せて鮮人相互扶助を行ふ目的」で、小樽朝鮮労働青年会の結成に至る。その執行委員長となるのは、軍教事件で境らとともに高商当局に抗議を申し入れた金龍植であった。軍教事件を契機にこの組織化が実現したわけで、「今後鮮人の労働問題や失業者救済について活動する」という（以上、『北海タイムス』二六年一月三〇日付）。

なお、軍教事件が社会的な大問題となりつつあることに反発し、「鎮撫運動」に出る動きも道内でみられた。坂東幸太郎代議士・堀井井護士・岩淵天涯らは旭川（一一月二〇日）や小樽（一一月二七日予定）で「軍教問題厳正批判演説会」を開催し、「無謀なる想定を糾弾すると共に将来戦争の避く可からざる国際事情の因果関係を詳論し永久平和の夢想を喝破して国防観念の緊張を図」ろうとした（『小樽新聞』一一月二五日付）。反軍反戦の気運が広がることに逆に刺激されたもので、これも小樽高商軍教事件の波紋の一つといえよう。

小樽高商社研からの通知を受けた学連は早くも一〇月二二日に「決議文」を出す一方で、各大学・高校の社研の抗議運動も開始された。二五日前後に出された学連執行委員会名の「全国の同志諸君へ！！」には、「学生社会科学連合会の各地の参加団へ中央委員会より、各無産団体とも提携して反対運動を起すことを命令しました。協力して反対運動を起して戴きたいと思います」（大原社研所蔵「小樽軍教事件」ファイル所収）とある。ほぼ同じ頃と推測されるが、学連では活版刷のビラ「全日本の学生諸君に訴ふ！——小樽高商軍事教育事件に関して——」を配布している。「軍事教育の正体は白日のもとに明かになった。然も、その正体たるや且つて吾々が予想した以上の恐るべき内容を含むものであつた」として、「想定書」と学連の二二日付の「決議文」を掲げ、「今や反対運動は各地に起りつゝある！

今日の学生諸君！ 我々は軍閥の傀儡ではない！ 母校は兵營ではない」（同前）と呼びかけた。

東京では、二六日に全国雄弁連盟・国際連盟学生支部・学生新聞連盟の各委員が会合し、運動方法などを協議した。二八日には芝の協同会館で「軍事教育糾弾大演説会」が開かれた。主催は在日本朝鮮労働総同盟・学連・一月会・政治研究会で、大山郁夫・布施辰治・是枝恭二・山本懸蔵らと金正奎・魚波らが弁士に予定されていた。ここに小樽から境一雄が参加したと思われる。「近来稀に見る盛大」さで、その決議文には「此の想定に現れし如く吾等の同胞たる無産階級並に朝鮮人を敵とすることを学生に煽動する軍事教育は当に教育の本旨を没却し無産階級の健全なる発達を阻害するものと認む」（『無産者新聞』第四号、二五年一一月一日付）とあった。

「不逞鮮人」の「殲滅」が想定されただけに、朝鮮人関係団体の立上がりはすばやい。早くも一〇月二三日には在

日本朝鮮労働総同盟が「日本無産階級に与ふ」というビラを配布する。「日本の無産階級の諸君！ 諸君は、今日日本軍事教育上のあの想定が如何に一昨年の震災当時のあの事実と関連あるものであるかを容易に理解するであらう」と述べ、「諸君は此の罪惡に対して無産階級の態度を示せ」と訴えるのである。さらに、二六日には在日本朝鮮労働総同盟など九団体名で「声明書」（原文朝鮮語）を発表する。そこでは「一昨年に我等を実際に「殲滅」して見た彼等は、今や我等を想定に乗せておいて「殲滅」を演習し、将来に備へつゝあるのである」と断じて、「我々は、朝鮮人の立場から、又階級的立場から、小樽高商事件に対して与論を喚起すると同時に、日本〇〇の根本罪惡を声討すべき」と声明する（以上、大原社研所蔵「小樽軍教事件」ファイル所収）。

その後、各地の反対運動では、朝鮮人団体と学連・労働組合・政治研究会の連帯と共同行動が実現していく（軍事教育反対同盟横浜協議会や反軍教同盟福岡準備会の結成など）。そうした演説会は一二月四日に神戸、六日に京都、九日に横浜で開かれている。このうち京都の小樽高商軍事想定問題糾弾大演説会は「中止！ 中止！の連発で、無量五十有余名の弁士が一蹴され千三百の聴衆に白熱的覚悟と感銘」を与えたという（『無産者新聞』第六号、一二月一日付）。

軍教反対運動の大学方面への広がり的一端を示すものとして、『日本労働年鑑』一九二六年版の記述を引こう。

- 十一月八日 朝鮮学生会は軍教反対決議文を作つて各学校に配布
- 十一月十日 青山学院記念日に軍事教育反対を決議す
- 十一月十二日 早大軍事教育批判演説会、五日に開かれる筈を総長の禁止に依つて悶着を起した。この日帝国主義批判演説等ありて盛大なる演説会を開いた
- 十一月十三日 軍事教育反対の決議文をのせた立大新聞差押へらる
- 十一月十六日 立教大学の同問題批判演説会中止を命ぜらる
- 十二月七日 軍事教育反対同盟主催の下に軍事教育批判演説会が神田青年会館に開かれたが検束者二十名に及んだ

いくつかの補足が必要である。一二月二日、早稲田の社会科学研究会・雄弁会・新聞学会などは「全早稲田軍事教育反対連盟」を組織し、「吾々は当面の軍事教育に対して反対するを以て足れりとせず、更に一步進めてその根源たる即ち帝国主義に向つて積極的に否定的に反対運動を為すものである」（大原社研所蔵「小樽軍教事件」ファイル所収）と訴えた。六日には、各大学の代表者五〇名が日大に会して全国学生軍事教育反対同盟を結成する。一三日には、立教・帝大・早稲田大学新聞主催の「學術研究擁護大演説会」が報知ホールで開かれ、大森義太郎・長谷川如是閑・千葉亀雄・麻生久・大山郁夫が登壇し、聴衆は六〇〇名にのぼった。『早稲田大学新聞』第七九号（一二月九日付）は、「學術的見地より 軍教の正体を発く 社会を欺瞞せる軍教を俎上に載せ忌憚なき批判のメスを加ふ」と報じた。二日には、東大で弁論部主催の「軍教批判演説会」が開催され、新人会と七生社が論陣を張った。「賛成派はいづれも積極的な理論を示さず終始、消極的な弁護論に終つたが、反対派はいづれも痛烈に軍教の不合理性を剔抉し聴衆も又双方より野次を交換して近來稀に見る活氣横溢の会であつた」（『帝国大学新聞』第一四三号、一二月四日付）という。

『教育週報』第二七号（一二月二日付）は「軍教呪ひの声」と題して、「小樽高商に於ける「想定」問題をきつかけに一波万波を起して各学校に軍事教育に対する反対の声が再発した。中には反軍教運動にこんごろがつて諸種の問題が渦巻いて居る学校もある」という記事を書ける。「軍事教官と体操教員の衝突」という水戸高校のほか、上述の青山・早稲田・立教の各大学の紛擾である。ついで同第二九号（一二月五日付）では「反軍教運動の火の手未だ治まらぬ間に、更にまた福岡高校、七高、京都帝大・同志社等を中心として最近一週の間に思想問題を背景とする学校の紛擾が続出しつゝある」とする。

この京大・同志社は、「京都学連事件」の端緒となる事件を指している。一二月一日、京都府警察部特高課は京大・同志社の寄宿舎や両大学の社研会員の私宅・下宿などの家宅搜索をおこない、三〇名以上の学生を検束した。その発端となつたのは、一二月一五日に京都市内や同志社大学構内に貼付された朝鮮自由労働団体などの「狼煙ハアガル、兄弟ヨ、コノ戦ニ参加セヨ」と題した軍教反対ビラであつた（文部省学生部『学生思想運動の沿革』）。

小樽高商軍教事件が報道されるとともに、新聞の社説のほか、雑誌などでの論説が数多く掲載された。ほとんどが文部省や陸軍省、また軍教反対運動の抑圧に走る学校当局への批判的な論調である。一つだけ、「思想的争を増長する危険 軍事教育について」と題する一二月七日付の『東京朝日新聞』の社説をみると、「軍事専一、絶対服従の下に教育されて來た軍人の、軍隊的国家觀念社会思想を以て、青少年の訓練に従事せしむるところに、初めより大なる

危険が存在してゐる」として、「軍事教育による学校の軍隊化」の流れと「平和思想軍縮傾向」の流れが「相反ばつして増大」することに強い懸念を示している。

最後に大山郁夫について。この問題に関して、大山は論説において、批判演説会における登壇において、もっとも熱心に論じた人物だが、それは大山のそれまでの思想展開から必然的に導かれるものとはいえ、「小樽高商軍教事件」として惹起したことに、ある特別の思いもあったのではないだろうか。『中央公論』（二五年一二月）掲載の「軍事教育の階級性の発現 小樽高商の野外演習に於ける所謂「想定問題」に関する一批判」で、「小樽高商で起つた事件は、同校の有志学生たちを始めとし、小樽労働組合、小樽在住の朝鮮人、政治研究会小樽支部員、及び同会札幌支部員などの敏速な活動と機宜を得た措置とに依つて、事実の真相が正確に突き留められ、且つ新聞紙の上にも報道される運びに立ち至つたのである」と書く際に、大山の脳裡に、半年前の五月に小樽および小樽高商を訪れ、おそらくその時に面識をもった社会科学研究会員や労働組合員の顔が思い浮かんだのでは、と想像するからである。

もちろん、早稲田での教え子であり、政治研究会に関わった境一雄の顔も同時に想起されたはずである。境が「想定」に即座に反応し、抗議運動に踏み出すのは、大山の指導によってなされた軍教反対運動の経験があったからである。境が一〇月二七日に東京に向つたとき、その訪問先に大山宅があったことも確かであろう。

四 その後の「軍事教練」

1 「軍事教練」の定着と停滞、強化へ

陸軍省では、一九二六年二月、『陸軍より観たる学校教練振作の情況』という小冊子を作成・配布した。これにより「軍事教練」の実施状況を概観すると、その範囲は「内地、南満洲及樺太に於て、将校を配属すべき資格を有する学校の総数一千百六十四校の中、今日迄に配属を終りしもの一千百三十四校に及び、未配属は僅に三十校を余すのみ」という。ここに現役将校を「一校一人主義を原則」に配属するが、二五年一二月二日現在で、大佐二〇人、中佐四七人、少佐二四一人、大尉六八二人、中尉一二四人の合計一一一四人を数えた。四月から一斉に配属する予定だったが、「人事行政上の困難、軍隊の教育、勤務就中軍備整理上の要求其の他」の理由で、まず四月上旬に師範学校に配属し、その後二回に分けて実施することになり、「七月より九月に至る間」に配属を終えた。歩兵銃・騎銃計五万挺が陸軍から無償譲与されることになっており、すでに約三三〇〇〇挺が各学校に交付ないし交付予定となっていた（なお、文部省側の調査では「校数一、一〇九校、将校数一、〇九六名」となっている〔「教練実施ノ結果ニ関スル件」二六年一〇月 前掲「学校教練」第一冊所収〕）。

本小冊子は「結言」として「実施後僅に数箇月の試練を経ただけ」だが、「大体に於て成功の曙光を十分に認め得る」と述べる。それは次のような観測から導かれている。第一に、「現役将校の配属」が学校当局にどのように受け入れられるかの懸念が「概して杞憂に了り、彼比能く協調を保つて居る」とみなすことである。また、学生生徒の反発抵抗への「憂慮不安は概ね一掃され、配属将校指導の下に、悦んで教練に従事して居る」とみる。第二に、「学生生徒の心身が緊張し、規律が正しくなつたと云ふやうな事例を耳にする」として、その「徳操涵養上」の好影響に言及する。波及効果として、学生生徒の兵營生活体験なども増えて「軍民相互の理解親和」が進みつつあること、「青年団、在郷軍人分会にも相当影響を与へ、刺激をなして居る」と指摘する。また、「府県当局又は学校当局に於て、学生生徒の氣風刷新訓育機関整備等の企を起した所も尠くはありませぬ」として、兵庫県の教練指導方針や広島県の中学校の「教練研究部」の活動を挙げる。

実施後一年を経過した時点で出された陸相訓示「配属将校ノ服務ニ関スル件」でも、ほぼ同様な認識と評価となっている（「大日記」甲輯一九二六年）。かなり身内の自画自賛気味ではあるが、「軍事教練」実施に手ごたえと自信を持つに至っている。

日尚浅キニモ拘ハラス学生生徒ノ心身ノ陶冶徳操ノ涵養ニ関シテ効果頗ル見ルヘキモノアリトハ学校並府県当事者多数ノ吹聴シ且感謝シアル所ナリ、将又軍部ノ親シク審査スル所ニ依ルモ些少遺憾トスヘキ余地ナキニ非スト雖モ概シテ予期以上ノ成果ヲ収メタルモノト認メ聊カ意ヲ強クシ諸官ノ快心ヲ想察スルト共ニ克ク異レル環境ニ適合シテ和衷協同ノ実ヲ失ハス而カモ操守ヲ全フシアルノ苦衷ヲ諒トシ其ノ奮励ヲ多トス

二七年七月の全国学務部長会同において、軍務局長は中等学校を念頭に、「生徒ノ朕モ良好デアリ質実剛健ノ氣風、規律節制ノ美風ヲ發揮シ校規ノ緊縮校風發揚ノ手段トシテ教練ノ効果殊ニ著シキモノガアリマス」(『業務指針』)と述べた。

同時に軍教反対運動については警戒を緩めなかった。陸軍省『陸軍より観たる学校教練振作の情況』(一九二六年四月)には、「唯小樽高等商業学校に於ける問題の如く、機会を捉へて、反対の氣勢を煽るやうな思想団体等は、今も尚存在して居りますが、幸学校に於ける教練の実施上には殆んど何等の影響をも与へて居りませぬ」と述べつつ、「此等の点に関しては将来共注意を要する」とするのである。二七年二月の陸軍次官の「学校教練反対運動ニ就テ」の注意については前述した。

その後、東京高等師範の配属将校森本義一中佐は、一般向けにまとめた『学校教練』(一九三〇年四月)のなかで、「教練振作施設開始の当時は、学校の内外に亘り反対の声高きものあり。中には北海道某校の如き演習想定文句を種に世間を騒がせしこともあつたが、要するに煩悶怪疑心の強き青年が、新設に対する一時の衝動に止まり、実験は何よりの証拠、今や教練の成績は日に向上し着々其の実績を収めつゝありて、いかに反対せんとするも反対し得ざる実情にある」と述べる。学校現場の配属将校にとって、時間の経過とともに軍教事件の衝撃は忘れ去られるとともに、その認識は矮小化したものとなったかにみえるが、軍中央にとっては、折からの学生運動の高揚とともに、軍教反対運動は再び脅威となってくる。

二九年四月の参謀長会同における軍務局長注意事項の一つに、「学生ノ思想運動社会運動ハ学校教練ト密接ナル関係アリテ是等ノ運動ハ明瞭ニ教練ニ反映スルモノナリ」があった。三〇年七月の陸軍次官の口演には、「学校ノ紛擾事件ハ一時其ノ鋒鋭ヲ収メ其ノ数モ極メテ少ナクナツタガ最近再ビ頻發シ本年二起ツタ事件デモ相当ノ数ニ上ツテ居ル」とある。そして、三一年一〇月の高等・専門学校以上の配属将校を召集した席上で、陸相は次のように述べるのである(以上、『業務指針』)。

我国社会運動ノ推移ヲ觀ルニ所謂左傾思想等我国體ト相容レザル潛行運動愈々深刻ノ度ヲ加ヘ特ニ此等運動ノ上級学校学生、生徒ノ間ニ旺盛トナレルコトハ、我国将来ノ為真ニ痛嘆ニ堪ヘナイ所デアル。……現時ノ世相殊ニ思想的傾向ニ對シ的確ナル認識ヲ得ルト共ニ之ヲ学生、生徒ニ移植シテ其免疫性ヲ増大シ他方關係方面ト密接ナル協調連絡ヲ保チ彼等ノ身上特ニ其行動ヲ詳ニシ教練ノ精進ニヨル効果ト相俟ツテ其策動ヲ未然ニ警防スルノミナラズ尚進ンデ適切ナル教化善導ノ方法ヲ工夫スルコトガ必要デアル

同時に、軍務局長は軍教反対運動の「年々増加」の趨勢は、「現役将校ヲ学校ニ配属シ且戦時ニ於ケル下級幹部ヲ学生ヨリ補充シテ居ル軍部トシテ対岸ノ火災視スル能ハザル所」とまで述べる。文部省では学生運動に対して強権的抑圧と「思想善導」で臨むが、軍部はそれを配属将校による「警防」と「教化善導」を通じて支えようとしたのである。この警戒感は、二・二六事件後の三六年七月の師団司令部付少将らの会同における軍務局長の指示——「今次事件ノ学校教練ニ及ボス影響ハ決シテ鮮少ナラズ一部ノ反軍思想抱持者ガ之ヲ教練ニ結び付ケ殊更ニ誹謗セントスルモノ少カラザル」——までつづく(同前)。

一方、文部省側の「軍事教練」評価はどうであろうか。二六年一〇月作成の「教練実施ノ結果ニ関スル件」(「学校教練」第一冊所収)では、将校の配属遅れにより「有形的ノ訓練」は十分ではなかったが、「精神的ノ感化ハ極メテ良好」で、「学生生徒ノ日常生活ニ現レタル事象ニ依リ其ノ効果顯著ナルモノアル」とされた。二年後の二七年二月、配属将校を前にして岡田文相は「既往ノ成績ハ能ク所期ノ目的ヲ達シ、学生生徒ニ精神的ノ好影響ヲ及ボシテ著シク質実剛健ノ氣風ヲ養成シタルコトハ学校当事者ノ異口同音ニ唱フル所デアリマス」(同前)と述べる。

陸軍・文部両省とも予想以上の順調な実施と効果を歓迎するも、先の引用中にあるような「些少遺憾トスヘキ余地ナキニ非ス」という問題点も指摘された。二六年三月、陸軍省が配属将校に發した「学校教練ノ施行等ニ関スル注意」によれば、「教材ノ按配ニ就テ」や「振作指針ノ研究」について注文が付けられるほか、教練査閲をめぐる問題が浮上してきた。「査閲ノ成績」を顧慮するあまり、「之カ施行前ニ俄ニ多クノ教練ヲ実施シ或ハ査閲ノ予行ヲ行ヒ而モ査閲後ハ教練ノ実施ヲ減スルカ如キ」事例があったのである。あるいは、査閲時の学生生徒の「出来栄」にこだわり、「姿勢態度及言語等ニ関シテハ全然注意セサル者アル」ということもあったという。これらは「学校教練ノ精神」を逸脱するものとして叱責された。配属将校自身が「平然」と「軍事教練」という語を用いる不用意さについても、注意が喚起された。

文部省では、先の「教練実施ノ結果ニ関スル件」のなかで、「学生生徒ノ勤怠」や「教練不合格者多数ナル学校」

の存在に関心を向けている。前者は、一部の中学校などの上級学年において「第三学期ニ於テハ極メテ出席率不良」となることで、その対策として上級学校入学において教練成績を「斟酌」することなどをあげる。師団ごとに集計された初年度の教練の不合格者は全体で二九八二人であり、要因として「欠席率大ナルモノ」「怠慢ニシテ成績不良ナルモノ」などが挙げられる。また、一割以上の不合格者を出した学校名が列挙される。全体で五九%の学校が不合格者を出し、なかでも慶応義塾予科・高等部などの私立学校の不合格率の割合の高さが目立つ。当然、これらの学校には次年度以降はきびしい指導がなされたはずである。教練の可否に直結すると考えられた「査閲」が点数稼ぎの場となる一方で、欠席・怠慢という不熱心さも顕在化していたのである。それは古今を問わず学生生徒の常習的生態といっていよう。

なお、二六年三月九日付の各配属将校宛の陸軍省副官名の通牒で「教練実施状況報告」の提出が指示されている。毎年三月末までに陸相・文相への報告が義務づけられた項目は、「教練ノ実施並其ノ進歩ノ概況」「学生生徒勤怠ノ概況」などであった（『大日記』甲輯、一九二六年）。陸軍省・文部省ともに、膨大な配属将校からの報告を概括したものをまとめたと推測されるが、それらの存在は確認できていない。小樽高商提出の報告は残っていないが、東京帝国大学提出の報告については照沼康孝「東京帝国大学に於ける軍事教練」で紹介・活用されている。

教練を受ける側の学生生徒の反応はどうだったろうか。小樽の事件が惹起する前、二五年八月五日付の『教育時論』に転載された『時事新報』への「軍事教育の正体」と題された投書で、ある高校生は「彼の教育法は曰く「距離測定、山の軍事的利用、法地図の使ひ方、兵式操練」一として体育を念じた物があらうか。頗る疑問だ」と述べ、「軍事教練にての収穫は九十度以上もある夏の酷熱の下で十分の休みの鐘も聞えず兵式教練を行つて次の歴史や伝説の時間に、漸く間に合つて汗だくだけの体で一時間打通して居眠の快を貪る位である」と皮肉る。また、軍教事件のさなか、「北の国の高校生」は「兵営化する校庭」を、次のように痛烈に批判する（『帝国大学新聞』第一四一号、二五年一月九日）。

彼等現役教官は常に「兵卒と学生は同一也」との大原則を固守し且その法則に依つて彼の全方針が支配されてゐる事を先づ思はねばならぬ、体操の時間にも下級教官は一一傲慢な彼に挙手の礼をして人員報告をする、老いて尚軍人精神の名残を見せる休職か退職の教官を見るとき哀憐の情に打たれ暴君の如き現役教官に対して満腔の義憤的反感を感じざるを得ない、かくて学校の体操は悉く軍隊化した、校庭は営庭化した

ただし、こうした「軍事教育の正体」の透徹批判や強権的な「兵営化する校庭」の暴露は、例外的な事例と思われる。一般の学生生徒の雰囲気は「軍事教練」や配属将校に対して冷ややかなものだったとはいえ、実施が決定された以上、消極的・受動的ながら出席するというものであっただろう。漠然とはあるが軍縮平和を志向する一部の学生生徒にとって、「軍事教練」や配属将校は不安や反発をかきたてるものであった。しかし、大多数の配属将校は陸軍・文部両省の指示に従って、意識的に融和的な態度で臨んだため、学生生徒たちは消極的ながら「軍事教練」を受け入れていったと思われる。もちろん、そこには在営年限の短縮という特典や上級学校進学への便宜という迎合があった。

小樽高商のような専門学校では必修科目であったが、大学においては随意科目とされた。

照沼「東京帝国大学に於ける軍事教練」によれば、東京帝大における二五年度の「軍事教練」受講者は全体の約一六%であった。その後二年間はやや減少したものの、兵役法の改正により一年志願兵制度が幹部候補生制度に変更されるなどを受けて、二八年度から増加に転じ、三三年度には半数前後の学生が受講するようになった。ここでも「軍事教練」の定着が進みつつあったのである。

陸軍将校向けの『偕行社記事』にも、配属将校による報告類が散見する。二六年九月（第六二四号）の某配属将校「某中学校生徒の現役将校配属に対する所感」では、九五%の生徒の回答が「心身ノ鍛練ノ必要ヲ説キ好感ヲ有シ大ニ教練ノ振作ヲ煩セルモノ」ながら、二三〇名中わずかに六名の「好感ヲ有セズ又ハ希望ハスルモ嚴格ナルヲ欲セズ自由ヲ欲スルモノ」という回答に警戒を寄せる。「自由尊重、階級打破と云ふ様な思想が彼等の脳裡に込み込み、規律、節制、服従と云ふ様な観念が漸次薄らぎつゝあることは、毎日教育を受けつつある彼等にもあると云ふことは、誠に寒心に堪へぬ」とするのである。

中等学校において「軍事教練」の定着は順調だったのに対して、高校・大学などでは実施は定着しつつも、その中身では配属将校自身が遠慮し、徹底を躊躇する部分があった。『偕行社記事』二六年六月（第六二一号）の川原歩兵大佐「学校教練実施に関する一部の研究」には、「縦令大学であつても、必しも中学や専門学校よりも程度の高い、学術科を教育せねばならないと考ふべきものでなく、否寧ろ現時一般学生生徒の実情は、高等の学校に進めば進む程、

教練の目的たる諸要素、殊に諸徳及動作は却て退化の状態に在り」という一節があり、「過渡期殊に前、本年度の如き創始時には、教授要目の選定及輕重に就て、適切なる裁量をなすべく、相当の考慮を要する」とする。また、二七年一月（第六三八号）付録の「学校配属将校経験録」にも、「専門学校以上にありては総て自治的に行はしむるを良とす例へば野外教練に於て行軍輸送會計宿營、部隊の編成等は方針を示し生徒をして行はしめ職員は傍系にありて監督す生徒一般に対する諸注意も指揮官たる生徒より行はしむべし」とある。これらは高校や大学において「軍事教練」をあまり厳格に実施すると、支障が出かねないという現状をうかがわせる。

ある配属将校は、自らがあまり歓迎されざる存在で、冷ややかに迎えられたことを描写する。東京高等師範の配属将校森本義一中佐は著書『学校教練』（一九三〇年）のなかで、「専門学校及び大学に於ける学生生徒の空気は、大小の差こそあれ余りこれを歓迎しない、教授の中にも反対する者があると謂ふ始末であつた。配属将校が初登庁の気分では校門に現はるゝや、各教室の窓から嘲笑を交へた拍手で迎へられた位はまだよかつたが、愈々授業を開始せんとするや、未だ嘗て経験せざる各種の皮肉、悪戯を含んだメンタルテストに会し少からず面食つた」と書くのである。この雰囲気は、軍教反対運動の余波とともに、一九三〇年代半ばすぎまで続く。

このように「軍事教練」自体は定着しつつも、特に高校以上の学校での効果はあがらないことは、陸軍省中央でも憂慮すべき課題として認識されていた。一九三〇年三月、師団司令部付少将らの会同の席上、宇垣陸相は「専門程度以上ノ諸学校ノ教練ガ地方ニヨリテハ尚著シキ向上ヲ見ズ時ニ却テ中学校時代ニ修得セル効果ヲモ保持シ得ナイ状態ニアル」と言及する。また、七月には阿部信行陸軍次官が「従来ノ諸報告ニ徴スルニ高等学校以上ニ於ケル教練ノ実績ハ学年ノ進ムニ從ヒ中等学校ニ於テ修得セル程度ヲ保持シ得ザルノミナラズ却テ退歩ノ情態ニ傾ケルモノナキニアラザルハ誠ニ遺憾トスル処デアル」と繰り返す（以上、『業務指針』）。数年経過してなお、高校や専門学校以上の「軍事教練」は緊張感に乏しく、ルーズな実施にとどまっていたのである。先の『偕行社記事』にあるような配属将校の認識や現状追隨の配慮は是正されねばならなかった。

軍教反対運動とそれを支持する世論が、「軍事教練」による学校の兵營化を問題視したことに配慮して、陸軍では学生生徒の心身鍛練による「団体的觀念」の涵養（「教練実施ニ関スル要項」）という趣旨の徹底に努めた。まだ先の陸軍省『陸軍より觀たる学校教練振作の情況』（一九二六年二月）では、欧米各国における「純軍事教育を施し、軍事専門の學術を教養せんとするもの、他は國民としての有為の材を養成する為の手段として、軍事的教練演習を施さんとするもの」の二傾向のうち、日本は「何れかと申せば後者に屬し」という、曖昧な段階にとどまっているものの、第一線の配属将校は「所謂軍事予備教育なるものとは、全然その主義を異にし、その重点は、規律、節制、協同、團結、服従、忍耐、等の諸徳を涵養し、其心身を鍛練し資質を向上し、以て忠良健全なる國民を養成するに在る」（川原「学校教練実施に關する一部の研究」）という方針で臨んでいた。

そして、一九三〇年の陸軍次官の口演では「國家觀念ヲ明ニシ規律節制ヲ守リ、協同團結ヲ尚ヒ長上ヲ敬ヒテ其ノ命令ニ服従スルノ精神ヲ涵養セントスルノデアツテ軍事技術ノ習得等ハ寧ロ第二義ニ屬スル」（『業務指針』、防衛研究所図書館所蔵）と明言された。「國軍戰鬪方式ノ改變ト多年ノ経験」から「学校教練教授要目並教練内容ノ刷新拡充」の必要に迫られた一九三七年の段階でも、依然として「学校ニ於テ教練ヲ課スルノ目的ハ、学生、生徒ノ心身ヲ鍛練シテ其資質ヲ向上セシムルニ在リ」（陸軍省徵募課編纂『学校教練必携』前篇）とされた（もっとも、このとき大学における「軍事教練」の必修化という転換がなされたが）。

日中戦争が全面化した一九三〇年代後半になると、それまで不徹底だった大学における「軍事教練」が強化されていった（拙著『戦前文部省の治安機能』二〇〇七年、校倉書房）。三八年二月立案の陸軍省「大学学部教練振作」では、「今や私立各大学ノ教練ハ着々向上セラレツツアルニ拘ラス官立諸大学ノ教練ハ振作ノ余地大ナルモノアリ須ラク率先教練内容ノ強化充實ヲ図リテ之カ刷新ニ努メシムルハ正ニ今日ノ急務」とされ、「術科（各個、部隊教練、射撃、指揮法）」が必修となり、出席不良者（七〇%以下）は合否判定で考慮するとした（『大日記』甲輯、一九四〇年、防衛研究所図書館所蔵）。合わせて軍部からは「国防能力の重要素たる青年学徒の体力向上と戦時事変に伴ふ凡ゆる困難を克服すべき形而上の陶冶鍛練こそ、此の際特に強調すべき喫緊事」ともされ、「教練の日常化」も提唱される（吉田彰雄〔陸軍省兵務局課員〕「事変下学校教練の指導に就て」『文部時報』第六四六号、三九年二月二一日）。

さらに四〇年五月、「軍事教練」創設時の「覚書」を一五年ぶりに改訂して「教練ニ関スル陸軍、文部両省協議覚書」が結ばれた。その「第一章 目的及訓練要綱」では「教練ハ学徒ニ軍事的基礎訓練ヲ施シ至誠尽忠ノ精神培養ヲ根本トシテ心身一体ノ実践鍛練ヲ行ヒ以テ其ノ資質ヲ向上シ国防能力ノ増進ニ資スルヲ以テ目的トス」と規定さ

れた。「軍事的基礎訓練」と位置づけられたことは、それまでの学生生徒の心身鍛錬による「団体的観念」の涵養という方針からの大転換である。この「覚書」解説に「特ニ重要ナルハ教練成果ノ日常化ニアリ從來此点十分ナラス生徒ノ日常行動ト教練ノ精神ト一致セス敢テ表裏ニ様ノ行動ヲ默認セラレアルハ遺憾トスル所ナリ」とあるように、大学における「軍事教練」改革は急で、ルーズな運用の見直しが断行されようとした。

大学における教練の実施時間数も、一二〇〇ないし一二五〇時間が基準とされた。このために大学では「毎年四日乃至七日ノ野外演習日ヲ増加」するが、それは「最高学府ノ学生トシテ将来国家ノ枢要ナル指導的立場ニ立ツヘキニ思フ致シ軍事常識二十分ノ理解ヲ有セシムルコトノ絶対必要ヲ認メタルニ由ル」（以上、「学校教練」）ものであった。この「軍事教練」の強化について、文部省は「皇国民錬成」という観点から全面的に協力した。

こうした「軍事教練」の質的転換は、対米英戦争の急迫とともにさらに徹底される。一九四一年九月の軍・師団兵務部長等会同における口演で、田中隆吉兵務局長は「今尚創設当時カ如キ旧套ヲ脱セス躍進日本ノ現況ニ対シ遠ク追隨シ得サル如キモノアリ」（陸軍省兵務課編『学校教育乃参考』第三卷第九号）と述べるに至る。「創設当時ノ特種事情」とは軍教反対の声に配慮しすぎたということだろう。「学徒ノ心身鍛錬ノ具」という目的が「変態的思想」と切り捨てられるのは、その後学徒動員にまで直結する学生生徒の即戦力化の要請と対極にあるからであった。



市役所前での軍教風景 1939 年卒業アルバム

重視と質的転換
号（第三卷第

陸軍省兵務課編集の『学校教練乃参考』と題する配属将校向けの雑誌が一九三九年一月から発刊されたことも、「軍事教練」への要請があったからであろう。その四一年一二月

一二号）からは、対米英戦争直前の「軍事教練」の実相が読みとれる。まず、一〇月一三日と一四日、「参加校帝大、早大、慶大等東京府千葉県下の大学廿三、参加学生職員七千百余名」という文部省主催の大規模な学徒野外連合演習が実施されたことである。橋田邦彦文相は統監としての訓辞のなかで、「学徒修練の途多しと雖も国民精神の昂揚と身体鍛錬を一体とし軍事的基礎能力の涵養を期する学校教練は実に高度国防国家体制の確立と聖戦遂行の根基を培ふもの」と述べる。東条英機陸相も観戦したというこの演習の想定は、「房総半島ニ侵入セル敵ヲ撃滅スベキ任務ヲ以テ水戸方面ヨリ南進セル北軍主力（二師団ヲ基幹トス）ハ勝浦町付近ヨリ房総半島東海岸ニ沿ヒ北進セル敵ト昨十三日正午以来大網町（千葉東東南約二十軒）及其ノ東南地区ニ於テ遭遇シ戦闘中ナリ」などというものであった。

中央審判官長の田中兵務局長は講評で「一般に終始真摯なる態度を以て演習に従事し其の成果の見るべきものある」としつつも、指揮掌握を「一般に不十分なり」とするほか、士気・体力についても「一般に活気乏しく士気旺盛を欠き体力の錬磨十分ならざるもの多し」とするように手厳しく、「大学に於ける教練制度の強化以来日尚浅く一層の向上を要するものあり」と注文をつけた。

この講評は一九三〇年代後半から「軍事教練」の強化を図りながらも、大学などでなお十分に徹底せず、ルーズさが残っていたことを示す。『学校教練乃参考』同号掲載の「学校教練を語る配属将校座談会」でもそれが話題となっている。東京帝大の配属将校森本邦太郎大佐は「大学の教練を振作せんとしたならば、先づ高等学校でしつかりやつて、そしてそれが緩まぬやうに帝大の一年から仕上げるといふことにしなければならぬ。ところが高等学校から来た者は、野営に行くと、ハイキングのような気分で「高等学校のコンパをやりたい」「やれ」と言ふと、高等学校でかうやつたのだからといふ事を言ひ出して、それはいかん、そんな馬鹿なことはないといふことで、これを抑へるのに骨が折れるのです」と発言する。一高配属の熊野利助大佐は「一高なんかは天下のずぼらの模範だといふやうに思つてゐる人が相当にある」という評価はあたっているとして、「体力の養成」や「日常生活と教練の連繫」などに注意して、「わ

からして実行させる」ようにしていると述べる。

アジア太平洋戦争期後半に「軍事教練」の拡充徹底が図られたことはいうまでもない。四三年九月二日の「現情勢下ニ於ケル国政運営要綱」の閣議決定を受けて、陸軍省では「聖戦ニ対スル思想確立」の一つとして、「学校教練ヲ通シ青少年学徒ノ指導ヲ強化」することをあげる。文部省では「国内態勢強化方策措置」として、勤労働員の強化・国防訓練などとともに、「軍事教練」の強化などを掲げた「教育ニ関スル戦時非常措置方策」を立案する（一〇月一二日に閣議決定）。それは四四年二月八日付の「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ伴フ学徒ノ軍事教育強化要綱」として具体化された。軍事学・兵器学の新設のほか大幅な軍事教育の時数の増加（一年生は一九六時間、二年・三年生は一一二時間）などを内容とするこの措置について、小笠原道生体育局長は「今や学徒は名実ともに第二の国軍であり、今日の学徒は明日の強兵である」（『朝日新聞』四四年二月九日）と述べる。『教育』誌上では、「学校教練制度が布かれてからまさに二十星霜、こゝに軍教体系は確立されたといつてよい」としたうえで、「今日の学徒には兵・労・学の三者が負荷されてゐるといはねばならぬ」と論評した（第一二巻第三号、四四年三月）。

しかし、四四年七月八日付の通牒「学徒勤労働員ニ伴フ軍事教育ノ実施ニ関スル件」では、「勤労要請ノ現況」により、「軍事教練」の時間数を減免してもよいとされるようになった（福間敏矩『学徒動員・学徒出陣—制度と背景—』、一九八〇年）。学生生徒に負荷されていた「兵・労・学」は、「労」が最優先されるようになった。戦局の最終段階において「軍事教練」の機能は縮小される一方で、「学徒出陣」として学生生徒は「校門から営門へ」直接送り込まれるようになったのである。

2 小樽高商の「軍事教練」

軍教事件後の小樽高商の「軍事教練」の実施状況を、新聞『緑丘』を中心に概観してみよう。軍教事件直後の一九二六年一月二七日の教練査閲が、「本校は曩に想定事件ありて、社会より疑惑の念を抱かれ居るも、今回の査閲成績が其の疑惑を一掃せる」（『緑丘』第八号）とあったように、緊張感に包まれていたことは前述したが、その後もまだ余波がつづいていたことを推測させるのが、二六年一〇月の第七師団による「札幌對抗学生大演習」である。鈴木少佐を指揮官とする西軍は小樽高商や小樽中学などの二〇〇〇名と軍隊側からの騎兵・野砲隊・機関銃隊の各一中隊で構成され、北大予科などから成る東軍と手稲平原で遭遇戦を演じた。『緑丘』第一二二号（二六年一一月一日付）は、「両軍は夫々砲兵援護の下に戦線一里に亘つて歩兵の大展開を為し、野砲、小銃、機関銃等の断続的轟声に天地を震驚せしめつゝ最後に雨中泥濘を飛ばして壮烈極まる突撃戦に移た」と描写する。その後、こうした大演習は実施されないことからみて、軍教反対に揺れた学校・札幌地域を引締めようという意図があったように思われる。

その後の特徴的な点をみると、第一にスキー教練の実施があげられる。導入は懸案だったが、二九年冬からおこなわれるようになり、『緑丘』第三八号（三〇年一月二七日付）は「スキー教練は普通の教練と異る所なく身体の鍛練、団体的精神の涵養を目的としウインタースポーツとしての自由は絶対許されずかなり厳肅な紀律の下に行はれ殊に最近は銃を負はせる等スキー教練は案外好評ある実績を挙げて居る」と報じている。これは小樽高商の恒例となり、野外教練や教練査閲でも実施された。三六年『教授要目』中の「教授事項」をみると、各学年とも「各個教練」「部隊教練」で「冬季ハスキーヲ利用シテ行フ」とされている。三九年一月の野外教練では「大部隊は天狗山へのスキーの快速を利しての快急進撃」（第一二〇号、三九年二月二五日付）という具合であり、「時局の変転に北方の重要性緊急を告げる今日、本校のスキー教練にも新たな注目が向けられてゐる」（第一四三号、四一年一月二五日付）と自負された。

第二に、「満洲事変」後、野外演習が札幌月寒の連隊兵営での宿営（三日間）で実施されるなどの「軍事教練」の内容面の拡充である。三三年五月の二・三年生が最初で、「前進又前進と云ふも勇ましいが汗で体中はビツシヨリ、砂埃で手も顔も真黒、銃を持つ手は疲れ、足は棒の様に。軽機関銃の音も引つ切りなしに響き、演習気分横溢。進め。伏せ。の連鎖で敵陣へ。休戦ラツパが鳴り響く」（第七三三号、三三年五月三十一日）という訓練が展開された。三四年五月の一年生の兵営宿泊でも、「平射砲と曲射砲との兼用新式歩兵砲を見学、終つて愈々戦闘教練。炎熱の中を走り疲れて頂く罐詰の肉とパンの昼食の素敵なこと。それより重、軽機関銃及毒ガスマスクの見学をなす」（第八〇号、三四年六月二二日）という演習ぶりである。以後、三年生の野外演習がこの月寒連隊での兵営宿泊として実施されることが多くなった。

陸軍の「軍事教練」重視方針と関連すると思われるが、小樽高商に配属される将校が少佐クラスから中佐クラスに

格上げされてくる。鈴木少佐の後任が中佐（佐藤）となったことは、軍教事件の影響かもしれないが、その後は中佐クラスがほぼ定着する。三一年四月赴任の深草、三三年九月赴任の米山、三七年四月赴任の嵯峨亮吉である（その前任の川村脩は少佐）。嵯峨の在任は四四年三月までの長期にわたり、この間に大佐に昇任する（後任の箕輪代次は大佐）。また、これ以外に教練科に中尉クラスの教官が配属されている。三六年の『教授要目』によれば、配属将校（川村少佐）のほか、吉野隆吉（講師、大尉）と斉藤直（助教授、少尉）が「体育（教練）」を担当していた。『緑丘』第一五八号（四二年四月二五日付）には、「前に斉藤中尉、此度片岡中尉出征後の本校教練教官陣は、学校教練の重要性益々加ふ今日痛く多忙を極めてゐたが此度後任として原憲一中尉を迎へた」という記事が載る。

第三に、「軍事教練」の内容である。年一回の教練査閲については一般に「優良」「良好」などと賛辞されることが多く、実際の状況は不明ながら、小樽高商のような専門学校の場合は大学や高校と異なり、概してルーズなところは少なかったようである。『緑丘』第二五号（二八年五月三〇日付）の「緑丘人の叫び」に、「C.C.C」という学生は「教練に於ては服装は正装にあらずして、略装であつてもいいと思ふ。一枚しかないヨソ行洋服で、通つたり、寝つたりするのは、やりきれない、ではない、従つて動作も鈍くなるワケ。此点前の鈴木サンの頭のいいことを感謝する」と投稿する。前任の鈴木少佐は学生の服装の規律にやかましくなかったが、次第に厳格さが求められるようになった。三四年の査閲の場合、「北大各学部平均出席率は六割五分」という程度だったのに比べて、小樽高商は八六%という「著しく良好な出席率」であった（第八四号、三四年一二月一三日付）。

三六年度の「教授要旨及方針」は次のようになっている（『教授要目』）。

1. 本校生徒将来ノ社会的地位ニ鑑ミ軍事諸般ノ問題ニ関シ正当ナル理解ヲ得セシメ 又衆心ヲ掌握シ之ヲ意図ノ如ク指揮運用シ得ル如ク統御ノ真諦ヲ体得セシムルニ努ム
2. 教練ノ実施ハ其教材ノ如何ヲ問ハス専ラ生徒ノ精神的鍛練ニ資スベキ主旨ヲ強調シ人格ノ陶冶ニ努ム就中国家的觀念ヲ明徴ニシ帝国伝統ノ精神ノ涵養ニ遺憾ナカラシム

この時点ではまだ「軍事予備教育」という側面ではなく、「生徒ノ精神的鍛練」に重きが置かれていた。各学年二時間（全体は三四時間）で、年間では二年生がもっとも多い六七時間（そのうち一七時間は「他教材ト併セ実施」）と野外演習四日間という規定であった。「体育」という必修科目ながら、その内容はすべて「教練」となっていた。

小樽高商創立まもなくから二四年間の前半は「体操科」教師として「兵式訓練」を、後半は配属将校の補佐として「軍事教練」を指導してきた菅安右衛門は、三五年三月の退任にあたり、「軍事教練」が始まった当時は「社会情勢が盛んで教練も種々困難な事態に遭遇したこともあり今日から見ると今昔の感が致します」（『緑丘』第八七号、三五年五月一五日付）と述べている。軍教事件から一〇年を経て、「軍事教練」は定着したのである。

その定着の上に、日中戦争が全面化した三八年一〇月の野外教練になると、「学校教練の目的」は「一、国防能力ノ増進 二、重点教育 三、時難克服 四、体力気力増進」（第一一六号、三八年一〇月二五日付）とされ、次第に「軍事予備教育」の色彩が強まってきた。同年一〇月の教練査閲の眼目は、「非常時下に於ける学生の緊張度及び体力如何」（第一一七号、三八年一〇月二五日付）に置かれた。三九年六月の野外教練では、「皇軍」は支那に、「高商軍」は伍助沢に（第一二四号、三九年六月二五日付）と謳われた。同年一〇月の教練査閲の講評では「国防能力の増進と学校教練の関係」（第一二九号、三九年一〇月二五日付）が力節され、学生の一層の奮起が求められた。四三年二月に実施された全校野外スキー教練について『緑丘』第一六八号（四三年二月二五日付）は、「朔北の皇軍将兵を彷彿せしめ」と題して、「戦時下、強兵健民の成果を挙げた」と報じた。

前述の四四年二月八日付「教育ニ関スル戦時非常措置方策二件ヲ学徒ノ軍事教育強化要綱」を詳細に報じた『緑丘』第一八一号（四四年三月二五日付）は、「軍事教練の画期的強化 戦時下学徒の責務重大」という見出しで、「こゝに於いて校門は営門に通ずる言葉通り学園に於ける教練は決して入営の爲の予備的な存在ではなく、明日の日にも第一戦に征で立ち立派にその義務を果し得る本格的な演習であらねばならぬ」と解説する。「軍事予備教育」の段階さえ越えて、「軍隊教育」そのものの役割を求められているのである。それは同号掲載の、配属将校嵯峨大佐の「学校教練の強化に就て」によくあらわれている。嵯峨も「従来学校教練は軍の予備教育であつたのでありますが今次の改正に依り学校は軍隊教育の一半を担当することゝなつた」と明言し、次のように展開する。

学校長は連隊長格で教練を監督指導し配属将校は大隊長格で連隊長たる校長に対し教育訓練の責を負ひ各職員は校長の分身者として各方面から教練に協力して其成果の向上に努力してこそ初めて其目的を達し得るのであります。而して学校教育も今や戦後必要なる教育を行ふのではなく決戦に必要な所謂必勝教育であり此際決

戦に不必要なる教育は一先づ後廻とし一路必勝教育に透徹邁進することに依つてのみ現在の難局を突破し世界無比の皇国を守護し聖慮を安んじ奉ることが出来ると信ずる次第であります。

本来の学校教育が「軍事教練」に従属する状況に、小樽高商も例外なく突入していった。ただし、前項でも指摘したように、もはや一九四四年段階以降、その強化された「軍事教練」の実施よりも、学生生徒を兵營に戦場に直接に送り込む「学徒動員」や、援農・工場動員という集団「勤労働員」が優先されてしまう。『緑丘』紙上でも、四四年四月以降、「学徒勤労」の特集記事は組まれても「軍事教練」に関する記事を見出すことはできない（第一九〇号、四四年一二月二五日付まで残存）。

五 小林多喜二と小樽高商軍教事件

1 「老いた体操教師」の造形

新たに発見された小林多喜二の「老いた体操教師」（『小説倶楽部』一九二一年一〇月）は、小樽商業学校から小樽高等商業学校に進学してまもなくの時期、一七歳で書かれ、投稿・入選した小説である。多喜二の卒業前後におこった実際の小樽商業学校の校長・体操教師排斥に絡むストライキ事件に取材している。

この作品の主人公「T先生」は、日露戦争に軍曹として従軍し、弾丸を腰にうけたため、足が不自由で、その痛みがまだ残るが、現状への不平の裏返しとして軍隊生活を常に懐かしむ、と造形される。まだ四〇代ながら「老いた」とされるのは、「だんだん内実の熱を失ひかけてゆく」からであり、「マツチ箱」の街の「みすばらしいすゝけた三軒長屋」に妻と二人の子供とともに暮らしている。身体的不具にもかかわらず、商業学校に体操教師として勤務できるのは、校長の庇護に絶対的に依拠しているからである。「敗れた壁、がやがやと騒ぐ子供等、……そんなものが待ちぶせてゐる」家に比べて、「学校で若い生徒に号令をかけているときは、華やかな軍人に帰ったような快楽を味わうのであった」。生活の不安や鬱屈を一時的にも忘れることのできる体操の時間は「T先生」にも「楽しいもの」である。軍人的な「単純な、邪気のない性格」ゆえに学校では生徒間に最も人気があり、信頼されていた。一方で、同僚の教師間ではやや軽く見られがちであった。

その「T先生」を突如、「恐怖、不安」が襲う。庇護してくれた校長が退任し、厳格な校長が着任することになる。「容赦なく淘汰」がおこなわれるという噂は、「貧弱な先生」をパニックに陥れる。そうした事態の到来を漠然と予測していた「T先生」は、「生きるため」新校長に迎合するようになり、風紀取締の先頭に立ち、「生徒のあらを探し、どしどしそれ等を罰した」。「号令は妙にかく張って、体操はもうたゞ無意味な行進と、重い鉄砲のみとなつた」。まもなく「T先生」排斥運動が起り、ストに発展すると、学校から放逐され、失職してしまう。その後、再就職の運動中、生徒と再会するが、「卑劣さ」を自覚する先生は、自らのそのように至った運命を甘受している。

一七歳の多喜二は、こうして中流階層の生活苦や転落の恐怖を題材として、人間や生活を探究・考察し、そこに自らといとおしさやユーモアを醸しだす。さらに、社会を直視することにより、社会矛盾に目を向けはじめる。まだ、社会変革の必要性や自らの関与を考える手前の段階にとどまるものの、初期作品群の一つに退役軍人の体操教師を題材にしたことは、多喜二文学にとって暗示的であった。

この前後の時期に、多喜二は中学校体操教師「T先生」を題材としたもう一つの作品を書きかけている（「断稿（その三）」『小林多喜二全集』第六巻所収）。そこではシベリア出兵で負傷・退役したという設定となっている。「老いた体操教師」と比べて、「自由にもならない腰をしながら、こうした過激なスキーをせねばならない自分——その境遇のようなものがしみじみと考えさせられてきた」と現状の境遇に不満である点は同じだが、「一度創つて役に立たなくなると子供だましのような年金をくれて、ほっぽらかす処置」に憤慨するなど、軍隊への呪詛が強く打ち出されている。いずれも「T先生」の境遇と意識の変化を丁寧に描写することを意図しつつ、「断稿（その三）」では軍隊への呪詛を隠れたテーマにしようとしていたように思える。

第七師団が日露戦争やシベリア出兵に出動したことから、退役軍人が中等学校の体操教師を勤めるということは、北海道・小樽では比較的良好な事例であり、多喜二の周辺にもあった。曾根博義氏の丹念な調査により、「T先生」のモデルが「富岳丹次」（小樽商業在職は一九一七年～二一年）であること、「老いた体操教師」は小樽商業時代ま

での富岳先生の略歴やエピソードに基づいて書かれた小説である」ことが判明した（「小林多喜二「老いた体操教師」の背景とモデル」『語文』第一二九輯、二〇〇七年一月）。小樽高商入学後に多喜二も受講したはずの「体操科」の教師は、やはり日露戦争の退役軍人である菅安右衛門（大尉、一九一二年～三五年まで在職）であった。菅は二五年の「軍事教練」実施まで「兵式教練」を担当していた。

この「老いた体操教師」の背景にある体操の時間は、東京高等師範教諭の廣井家太・森梯次郎『新時代の学校教練』が嘆くような、「現在の学校教練の多くは、予後備の将校によつて指導されてゐるが、教ふる人にもさしたる自信なし、教えられる生徒にも熱心がないから、その成績は殆どいふに足らぬ。従つて学校訓育の実績も挙り得ない状態である」に近いものだったと推測される。それは、おそらく多喜二自身も小樽商業・小樽高商の在学中に経験している。しかし、多喜二卒業後まもなく、「楽しみ」であった体操は「軍事教練」に転換する。実際にはその後も「軍事教練」は「楽しみ」の時間となっていたとはいえ、転換時に小樽高商であるような「想定」がなされたことは、多喜二にとって「軍事教練」の本質がどこにあるかを、自らの経験に照らして実感的にも受けとめる機会になったはずである。

2 軍教事件との関わり

多喜二は軍教事件惹起の一年半前、一九二四年三月に小樽高商を卒業し、北海道拓殖銀行小樽支店に勤務していた。倉田稔『小林多喜二伝』が指摘するように、多喜二が軍教反対運動に直接的に関わり、何らかの役割を果たしていた可能性は低い。小樽高商軍教反対運動の第一陣は小樽総労働組合や朝鮮人団体であり、第二陣は小樽高商社会科学研究会であるが、いずれもまだ二五年秋の段階では多喜二との接点はわずかであり、多喜二の思想展開の状況からみてもそうした社会運動の実践に踏み出すには至っていない、というべきであろう。多喜二固有の事情でいえば、一年前に出会った田口タキへの愛情が高まり、その不遇な境遇から救い出すことを具体的に考えはじめ、実行に移そうとしていた段階である（一二月にタキを救い出す）。

残念ながら、多喜二が母校を舞台とする軍教反対運動に当時どのような反応を示したのかは不明である。それでも後年の多喜二が、自らの思想展開の画期を小樽高商軍教事件とみていたことは確かである。『女人芸術』三二年一月号に寄稿した「故郷の顔」には、次のような一節がある。『女人芸術』掲載時に伏せ字となっていたが、その原稿の出現により、肝心の部分の記述が明らかになった（『北海道文学館報』第五一号、一九九九年一月 下線が伏せ字部分）。

小樽高商の軍事教練に、「不逞鮮人があらはれた」といふ指令を与へて、全国的に「軍教反対運動」の波をマキ起したのも小樽である。殊にこれが多数の朝鮮労働者をその影響下にもつてゐる労働組合と連絡をとつて、小樽高商の学生社会科学研究会が活躍した。林房雄が潜行してきて、「林檎」といふ作品を産んだのもこの事件からだつた。この学聯が後で「福本イズム」が旺盛となるや、重要な役目をつとめた。



1926 年卒業アルバム

つづいて山本懸蔵の二つのエピソード（後述のように『転形期の人々』に挿入）を紹介した後、「あの有名なゼネ・ストにも、三・一五にも、四・一六にも、その後のどの事件にも発輝された小樽の街の輝かしい左翼の伝統はその時に植えつけられたのである」とする。「その時」とは山本懸蔵の指導によって小樽の労働運動の中心が評議会系となったことを指すが、多喜二はそこに至る直接の契機として小樽高商軍教事件を押えているのである。

また、自筆「年譜」（一九三一年一月執筆）では「ぼくは小樽高商の所謂「軍教反対問題」に関係した友人から「マルクス」や「レーニン」や当時評判だった「福本和夫」の著作を読むことをすすめられた。なおその上に、山本懸蔵の立候補、種々の研究会、あの「三・一五事件」等々が、そのぼくの傾向を決定的なものにした。ぼくは又プロレタリア芸術理論や葉山嘉樹などを貪り読んだ」と書く。この前半の書きぶりからみて、多喜二の社会主義文献の読破は軍教事件以後であることは確かであり、それは二六年の「日記」からも裏づけられる。

「軍教反対問題」に関係した友人」とは誰であろうか。多喜二が小樽高商の卒業論文作成にあたり、クロボトキン『パ

『ノの征服』の原書を借りた齊藤磯吉は軍教事件後に退学処分となり、小樽を離れていたとみられるので、最も可能性があるのは小樽商業学校時代以来の友人寺田行雄であろう。多喜二の二六年五月二八日の「日記」には「もっともっと自分達は生活に対して「イージイ」だ。寺田達のことが考えられた。——信念がほしい！ 仕事の上の情熱と根気が欲しい、何より！」と書き付ける。この「寺田達」が、寺田行雄を含む解散させられた高商社研メンバーと思われる。自らの「イージイ」に対して「寺田達のことが考えられた」とあるのは、軍教事件で果敢に戦い、停学処分にも屈していない社研メンバーの「信念」・「情熱と根気」への畏敬の念のあらわれといつてよい。寺田は二六年三月に小樽高商を卒業し、『北海タイムス』小樽支局の記者となっていた。

藤田廣登『小林多喜二とその盟友たち』（二〇〇七年）は、二六年五月一日の北海道第一回メーデーをきっかけとした多喜二と寺田の交友を指摘する。それは、「寺田達のことが考えられた」という先の五月二八日の「日記」と照応する。その五月というタイミングは、三月の『クラルテ』第五輯終刊号発行、四月の田口タキを若竹町の自宅に迎えるという節目を経て、多喜二が新しい文学とそれにふさわしい生活・社会の模索に突き進もうとする段階であった。五月二六日から書き始めた「折々帳」という「日記」は、その発心を暗示する。多喜二から寺田への積極的なアプローチがあったとみて不思議ではない。

多喜二の卒業と入れ代わりに入学した手嶋恒二郎とも接点があったことは、多喜二が軍教事件を契機に社研メンバーと積極的に関わろうとしていたことを推測させる。手嶋の回想によれば、停学処分解除後も「忿懣やるかたなく」、「人というものが信じられなくなって」いたとき、多喜二に会いに行こうと思い、部屋で数時間待ったが会えなかったという。ここで手嶋は多喜二の作家としての精進振りの一端をみたといい、「壁一面に留金でとめられていた北海道全域の大きな地図、そしてその地図の上には、至るところに彼自身の手になるメモ書きが貼りつけられている」と描写する。この訪問の前に、寺田を介して手嶋と多喜二が面識をもったとするのが自然である。多喜二の「狭い部屋に足を踏み入れた途端に、ムツときたあの熱気」（以上、『ある情熱の記録 手嶋恒二郎伝』）という記憶からすると、手嶋の多喜二訪問は二六年夏前後のことであろう（手嶋は二七年三月に卒業）。

かつて私は『文学』としての小林多喜二（『国文学解釈と鑑賞』別冊、二〇〇六年九月）掲載の「日記」のなかで、『クラルテ』第三号（一九二四年七月）の「修身とサウシアリズム」において、多喜二は「最も道徳的な人こそ、最も偉大な社会主義者であらねばならぬ」（『全集』第五巻）と論じていた。小樽高等商業学校卒業後、北海道拓殖銀行に就職してまもなくの時点で、多喜二は漠然とではあるものの、社会主義に深く共鳴する位置に立っていた。そして、三年半後の二八年一月一日に「思想的に断然、マルキシズムに進展して行った」と書きつけるに至るが、その間にゆっくりと社会主義者へと成長＝「内的進展」していったのである」と論じた。すなわち、「年譜」で多喜二自らが回想する「ぼくは小樽高商の所謂「軍教反対問題」に関係した友人から「マルクス」や「レーニン」や当時評判だった「福本和夫」の著作を読むことをすすめられた。なおその上に、山本懸蔵の立候補、種々の研究会、あの「三・一五事件」等々が、そのぼくの傾向を決定的なものにした」というのは、二六年から二八年にかけてのおおよそ二年余りのじっくりとした「内的進展」であり、三・一五事件を前に、一月一日にはようやく「思想的に断然、マルキシズムに進展して行った」と自ら確信しうる地点まで進みでたのである。

この日記につづく「古川、寺田、労農党の連中を得たことは、画期的なことである」の地点には、次のような経過を通じてたどりつく。おそらく二六年前半、多喜二自身が軍教反対運動に刺激されて寺田や手嶋らとの接触があったものの、一直線に「マルキシズム」に向ったわけではない。行きつ戻りつのジグザグな歩みがあり、二七年二月になっても「社会主義者として、自分の進路が分っていながら、色々な点で、グズグズしている自分である。マルクスの「資本論」でも読んでみたい気がしている。が、その根本的な処に疑いをもっている自分は、結局、社会主義的情熱を永久に持てぬ人間のように思われる」（七日）と吐露する状況であった。

二七年三月の磯野争議は、「グズグズしている」多喜二の転機となった。争議演説会の外の熱気に触れ、「外では沢山の人が立ち去りもしないで、興奮し、官憲とブルジョワの横暴をならしていた。一労働者のようなものゝ口から「搾取」などゝいう言葉が常識のように出ていた。時代が進んだことを思った。皆目覚めているのだ」（三月一四日）と、時代の進展と民衆の覚醒を実感する。この興奮の冷めやらぬ四月三日、寺田の訪問を受け、「その方面に非常に得るところがあった」（四月一〇日）と特記する。寺田は労働農民党小樽支部の一員でもあった。

磯野争議につづく六月の小樽港湾争議では、多喜二は銀行退社後、争議団の裏方で実践運動に就く。八月、労農芸術連盟に参加し、九月には古川友一の主宰する社会科学研究会の例会に定期的に参加するようになる。それは、藤田

『小林多喜二とその盟友たち』が紹介する「一九二七年の夏だったとおもいます。夜おそくかえってきた弟が“きたよ、とうとう多喜二さんがきたよ”といって大変よろこんで寝ていた母と私を起こしたことがありました。たぶん、その夜何かの会合にはじめて多喜二さんが出席されたのでしょうか」（佐治澄子「弟の友人だった小林多喜二—思い出」『多喜二と百合子』第六巻第六号所収）という寺田の姉の証言と符合する。

そして、十一月二三日の日記には「随分長かった。二カ月の間、自分は何をしたろう。／古川氏達との研究会は、日、火毎毎回出た。『資本論略解』は終了した。レーニンの『弁証法』も終った。次は、『金融資本論』『コンミュスト・マニフェスト』をやる。而して自分自身としてはいよいよ小樽の労農党に交渉を持つ迄に、内的進展をするに至った。今晚古川氏と組合に行くことになっている」と書く。ここからは、翌二八年一月一日の日記に「思想的に断然、マルキシズムに進展して行った」と自覚するに至るのは一直線である。寺田・古川については、藤田『小林多喜二とその盟友たち』に詳しい。

このように多喜二の「いかにして社会主義者となりしか」という軌跡をたどるとき、小樽高商時代までにつかみ取った弱者・虐げられた者への視線と社会変革への志向は、小樽高商軍教事件・磯野争議・小樽港湾争議をそれぞれホップ・ステップ・ジャンプとして跳躍を遂げ、多喜二を自覚的な社会主義者に育て上げていったといえる。従来、磯野争議と港湾争議は多喜二の社会的実践運動への画期と位置づけられてきたが、それに先立つ小樽高商軍教事件は多喜二にとって思想飛躍の踏切板の役割を果たしたのである。具体的には、寺田を初めとする（旧）高商社研メンバーとの接触を通じての思想的な刺激であり、実践運動への接近である。

3 『北方文芸』への寄稿

寺田行雄や手嶋恒二郎が小樽高商を卒業して以降も、多喜二は母校と接点を持ちつづけた。『校友会々誌』や『北方文芸』への寄稿である。在学中から『校友会々誌』には頻繁に寄稿し、さらに二年生からはその編集委員もつとめていたが、卒業後、しばらく間隔があいた後、『校友会々誌』での再登場は二七年三月の第三八号の「人を殺す犬」であった（執筆は二六年夏。寄稿の経緯は不明）。その掲載にあたり、監生部のト部岩太郎教授が「あまり残酷なので出せない」と述べたことに対して、多喜二が「これを出す出さないなんて、些々たることだ。出したからって、出さないからって、『現実にある』事実をどうする積りだ」と「日記」（二七年三月二日）に記したことはよく知られる。

その後、『校友会々誌』が文芸作品の不掲載方針に転換したのは、那河捷平を中心とする高商の学生文芸研究会により『北方文芸』が創刊（二六年五月末）されるようになってからである。『緑丘』第一三号（二六年一月一日付）には、第三号の「北方文芸発刊近し」として「正に学園の文学的雰囲気を代表する権威者の如き観を呈して居る」とある。この『北方文芸』に、多喜二は第四号から第七号まで連続して寄稿している。

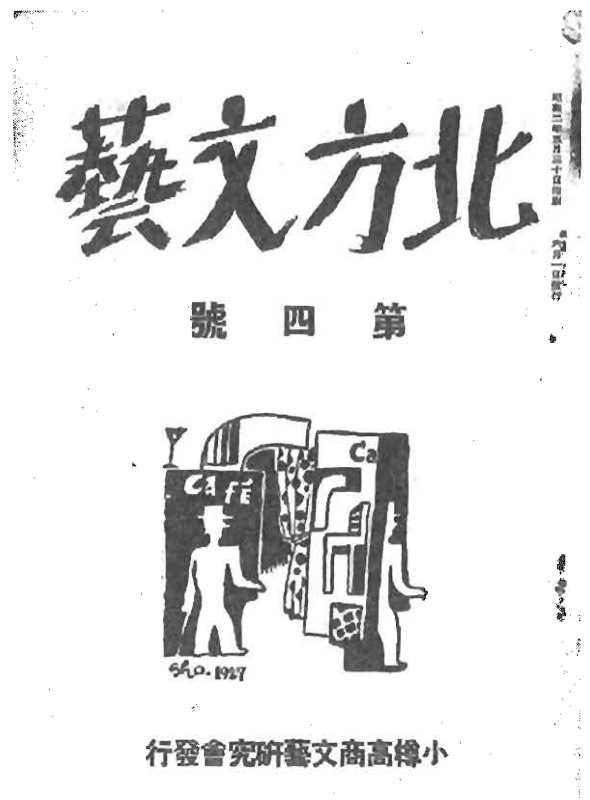
第四号（二七年六月） 「田口の「姉との記憶」」

第五号（二七年一〇月） 「残されるもの」

第六号（二八年六月） 「誰かに宛てた記録」

第七号（二九年六月） 「こう変っているのだ。」（評論）

第四号発刊の時点で、文芸研究会は椎名幾三郎（商業学・商業実践）と高橋益実（フランス語）を顧問とし、会員は五〇名以上を擁していた。『北方文芸』は学内にとどまらず、学外に読者・寄稿者を広げていく。『緑丘』第三六号（一九二九年一月二九日付）には、「北方文壇の第一線に活躍して巻を重ねる毎に名声を博し其の地位を確立した」とある。第六号には伊藤整も詩「林檎園の六月」を寄せている。なお、二七年五月二〇日、改造社文芸講演会で来樽した芥川龍之介と里見敦の歓



迎会を多喜二らが催すが、そこには小樽高商文芸研究会からも出席していた。

注目すべきは、第五号の巻末で、一頁を使って「読め!!」「文芸戦線」を読め!!と題し、「『北方文芸』の読者であるあらゆる人は、男も女も、そして一人も洩れることなく『文芸戦線』を読まなければならない。これは我々に与へられた歴史的任務ではないか」と呼びかけていることである。ここで想起されるのは、多喜二のプロレタリア文壇デビュー作というべき「女囚徒」が、二七年一〇月という同じ月に『文芸戦線』に掲載されていることである。しかも、多喜二はそのことについて「重大な事には! / 自分の「女囚徒」(一幕物)が/「文芸戦線」十月号に出ることになったのだ!! 今文壇のすべての注目の的になっている雑誌だ。/東京にいないことは残念の極みだ!! / この祝賀のために、二、三日武田や斎藤と興奮した日を過ごした」と「日記」に書きつけていた(二七年八月二五日程)。「武田」は武田暉のことで、彼の「敵」という作品は『北方文芸』第五号の多喜二の作品の次に掲載されていた。

その多喜二の「女囚徒」の載った『文芸戦線』を、『北方文芸』の編集部は「読め!!」「文芸戦線」を読め!!と呼びかけたのである。『北方文芸』の目指す方向は、多喜二の選りとりつつある文学の方向と重なっていた。むしろ、多喜二文学を指針とするようなかたちで、『北方文芸』はその編集方針を確立していった、というべきであろう。

後輩にあたる文芸研究会のメンバーからすると、多喜二は身近ながら輝ける先輩として別格的に見られていた。第四号の「編輯後記」(島田芳穂)には、「創作欄に小林氏の載けたのは全く嬉しい。同氏をここで紹介するなんて野暮臭いから抜きにする」とある。第五号・第六号ではともに巻頭に載せられる。『緑丘』第三六号には第八号の「発刊近し」として「現代文壇の雄小林多喜二氏其他数々の雄編滿載の筈」と報じられた(実際には掲載されず)。

「田口の「姉との記憶」では「淫売婦の一つ手前に見られていた」豆撰工場や鯨の奮闘に出ていく田口の「姉」を、「残されるもの」では「曖昧屋」=売春窟の光代や玉子という女性を、「誰かに宛てた記録」では義母のもとで「売られる」ために「やすぎぶしやおけさ」を教えこまれる小学生を題材にとる。こうした「家族もの」や「瀧子もの」に連なる小説が高商の文芸誌に掲載され、「社会の「えぐりだし」(「吹雪いた夜の感想」『小樽新聞』二八年一月三〇日付)の実践の試みを提示していくのである。

『校友会々誌』や『北方文芸』寄稿の作品群だけみても、多喜二の小説観の変化が読みとれる。「人を殺す犬」についての島田正策の「古い感じ」などの批評を「当っている」(「日記」二七年三月四日程)とする。また、二七年七月の執筆時には「自分ではモウパッサンの「脂肪のかたまり」などより自信のあるもの」と自負した「残されるもの」に関しても、古川らの小樽社会科学研究会に出席するようになった一〇月の時点では「その内容を包んでいるセンチメント、及手法に(微温的なところ)非常に不徹底なプチブル的なものが残っていると思う。揚棄されねばならぬものだ」(以上、「日記」一〇月一〇日程)と厳しい自己批評をおこなっている。

それをより意識的に推し進めた段階が、第七号掲載の「こう変っているのだ」である。かつて高商在学時前後には「漠然と、小説を書くことを「自己完成」のためだ、と考えたことがあった」ことが、それから小説のあり方は「恐ろしい」程の変化を遂げ、「経済的、政治的立場の上での芸術についてものを云うようになり、ものを「行う」ようになった」とする。そして、「社会は、生々とした社会的に価値ある内容を求めているのだ。——無雑作に、漠然と、興のおもむくまゝに書くことをやめよう、諸君!」と呼びかける対象は直接的には、高商文芸研究会のメンバーであり、後輩の高商生であった。最後を「小説に「恐ろしき内容」を劇薬のように盛れ! 意識的に、計画的に、そして最後に、最も重大なことだが、マルクス主義的に!」と結ぶが、これが学校公認の文芸誌に掲載されたことは注目に値する。多喜二は高商の後輩たちに直接働きかけ、後輩たちもそれを積極的に受け止めて編集に努めたのである。

『緑丘』第三八号(三〇年一月二七日付)には、「川島生」の「足の向く儘 財布戦線異状あり」というエッセーが載る。「川島生」とは『緑丘』『北方文芸』の編集を担当していた高商三年生の川島豊秋である。川島は「思想、文芸哲学の方面の本がよく売れるそうである。商業学方面の本を買ふ学生の少なくなった事は考へさせられる事象である。先輩小林多喜二氏の蟹工船が二百七十冊、ルマルクの西部戦線異状なしが百三十冊売れた中でその大部分は学生の手に渡ったそうであるが文芸思想の転換期を如実に物語つて居るではないか」と書く。小樽市内のある書店だけで、多喜二の『蟹工船』(二九年一月刊の「日本プロレタリア作家叢書」版)が二七〇冊も売れ、しかも学生が大半を買っていったことを伝える。小樽高商の学生が多くを占めると思われるが、「現代文壇の雄」として多喜二の名は母校において広く知れ渡っていたことをも推測させる。なお、このエッセーの載った面には花園町「丸文書店」の広告がでており、「最近当店で一番よく売れてゐる新刊書」として、

高商教授の高橋次郎『スキー術』・藤田嗣治『巴里の横顔』と並んで、『蟹工船』(五〇銭)があげられている。

『緑丘』第四五号（三〇年八月二三日付）に、村上清「炎熱下の感想」が載る。「僕は戦旗が文芸戦線に対する悪口に依る対抗心も手伝つてか、戦旗よりも永い事文芸戦線を読んで来た」というこの人物は、「戦旗の澁刺たる活躍に比べて、これは余りにもごたごたしたルンペンの寄り集りと云ふ感じ」と『文芸戦線』の低調ぶりを突く。そこでも、『戦旗』が彼等の『蟹工船』『太陽のない街』その他立派な作品をその誌上より街頭へ持ち運んだ」と評している。多喜二の存在は強く意識されていた。

さて、『北方文芸』は編集主幹川島によって、プロレタリア文学への傾斜を強めていった。『緑丘』第四二号（三〇年五月二七日付）は「百八十度廻転せる文芸研究会」と題して、第八号発刊について「人は明かに本誌より流れ行く時代の色彩を感知し、如何に多くの学生が真摯に完全なる社会意識を把握せんと努めつゝあるかを知ることが出来る、と報じている。同第四六号（三〇年九月二五日付）には、「学校文芸と云ふカテゴリーの中に束縛されながらもよく其進歩的役割を果して来たのであるが外部よりの投稿者の支持と相待つて愈々三度目の飛躍に進み秋期特別号を発刊する事になつた」とある。この「特別号」が第一〇号となる（未見）。すでに小樽を離れていた多喜二の寄稿の可能性は低いが、多喜二文学の後継者は着実に小樽高商に育っていたといえる。

しかし、第四八号（三〇年十一月二九日付）では「突如、「北方文芸」廃刊の厳命をうく」という見出しで、文芸研究会の解散を報じた。卜部生徒主事談として「階級意識に基く作品の発表は駄目」とあり、第一〇号の内容が問題視された（第九号・第一〇号の内容は不明）。廃刊を命じた理由は、「一、北方文芸第十号が余りに一方的に過ぎたる事 一、かかる雑誌の存続は学生の訓育上よろしからざる事 一、箇々の作品の検閲に於いては之を容認したるも（うち、二篇は検閲を経ざるものあり）之を綜合したる場合に一方的に体系づけられたること」という。

文部省学生部『思想調査資料』第一六輯（一九三二年一月）掲載の「プロレタリア文学運動の沿革と現勢」では、一九三〇年ころの状況として「学生・生徒の自発的企図によるプロレタリア文学運動」に言及し、「同人雑誌中の同人が左傾すると共に新たに左傾分子の結成による左傾芸術団体が学内に生れ、それ等が左傾文芸雑誌を刊行するに至つてゐる」と述べ、『大学左派』などととも小樽高商生を中心とする『北方文芸』をあげている（『文部省思想局思想調査資料集成』第五巻所収）。

なお、官憲側の記録である北海道警察部特高課編『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』によれば、『北方文芸』の名は登場しないものの、その編纂の中心人物である川島豊秋の名は、日本赤色救援会の小樽支部の表と、『戦旗』配布網の小樽支局学生班の表に二度登場する。この『沿革史』には多喜二や寺田行雄の名も記録されている。川島が多喜二と面識をもっていたことは確実で、その関係を通じての多喜二の『北方文芸』への寄稿があったはずである。推測を逞しゅうすれば、小樽高商軍教事件の遺産を引き継ぐ後輩の学生たちへのエールとして、『北方文芸』の数度の寄稿、そして左翼的傾向化に多喜二の積極的な働きかけがあったといえるかもしれない。

前掲『沿革史』には『戦旗』小樽支局の学生班の責任者として、また救援会小樽支部・『第二無産者新聞』小樽支部の配布網のなかに、高商生の間宮健三の名前も登場する。間宮は『緑丘』第三五号と第三六号に「アントン・チエーホフ二十五年記念」という文章を寄稿しているが、その末尾近くでは「労働能力なき吾人インテリゲンチヤはプロレタリアの「友人」たり得る時はあつても、終にその「同輩」たり得る時はないと私は思ふ」と書きつけている。川島とともに間宮も、多喜二の近くにいた人物である。

4 「転形期の人々」の造形

一九三一年一〇月から三二年四月にかけて『ナッパ』と『プロレタリア文学』に連載され、千枚を越すと意気込んだ大長編小説のまだ「序編」の部分で終わった「転形期の人々」は、小樽の手宮地区を舞台に一九二六年の「冬が近い」時期を物語の始点とし、そこからさまざまな登場人物の回想が複雑にからみあう構成となっている。小樽の二六年の晩秋から初冬といえ、一〇月から十一月であり、それはちょうど小樽高商軍教事件の一年後という設定である。軍教事件から数えて六年後にこの執筆・連載を始めるにあたり、多喜二はなぜ二六年晩秋から始めたのだろうか。

多喜二は「全篇の極く小部分」という「序論」を終るにあたり、「作者附記」として「次の「前篇」では福本イズムの抬頭、「中篇」では小樽のゼネ・スト、「後篇」では福本イズムの没落から三・一五まで、という風に進められる予定である」と記した。それは、軍教事件を発端に磯野争議を経て、「あの有名なゼネ・ストにも、三・一五にも、四・一六にも、その後のどの事件にも発輝された小樽の街の輝かしい左翼の伝統はその時に植えつけられた」という前述

の「故郷の顔」で示された「転形期」にほかならない。軍教事件に大きな刺激を受け、ゆっくりとした歩みながら「思想的に断然、マルキシズムに進展して行った」と宣言し、「現代文壇の雄」という世評を獲得するプロレタリア文学を生み出し、さらに小樽の社会主義運動の実践に深く関わる、そうした多喜二自身の「転形期」の軌跡と重ねあわせながら、この小説を構想・着手したというべきだろう。

連載中、多喜二は『短唱』（三二年四月）掲載の談話「「転形期の人々」の創作にあたって」のなかで、プロレタリア文学の「固定化一様化」および「日常生活的さ末的」という傾向を批判しつつ、「小樽に於て、組合、学聯、工場、ゼネスト等の中に、山川イズムが没落して福本イズムが如何にして起ったか、又それが如何にして再び没落したか等々」という「一つの時代を書いてゆく積り」と述べる。その「一つの時代」の始点が、軍教事件だったのである。

軍教事件の前史として、佐々木を中心とする「高商の「学連」」を、多喜二は次のように描く（この場合の「学連」は高商の社会科学研究会のこと）。

高商に「学連」が出来る前は、「政治研究会」と云って、四五人の小さな集りだった。佐々木はその一員だったのである。——何処の学校でもそうであるように、新しく洋行から帰ってきた若い教授のところへは、学生たちが色々な話を聞きに出掛けて行く。

「四五人の小さな集り」とは、斉藤磯吉・黒田力造は確実であり、寺田行雄も含まれているかもしれない。「若い教授」＝高杉教授は、高松勤を想定している。「政治研究会」が創立される「直接の動機は、早稲田大学に起った「軍事教練反対」から端を発した流血事件だった」とされ、「共産党宣言」や「国家と革命」をテキストに「毎金曜日の夜、先生の家」に集まった」。この「政治研究会」の転機が、二四年夏、「帝大の学生二人」によってもたらされる。一人は北大の「島田」で、もう一人は東京帝大の松岡^{はたよ}二十世をモデルとした「松山幡也」である。松山の来樽は「組合を作る仕事と同時に、全国の大学や高等学校などに作られつゝある「社会科学研究会」を更に強化するために、その全国的な統一、連絡をとるためだった」。

そして、松山の指導により、「行動」が重視され、小樽の労働者のなかに組合を作ることがめざされると、「研究会」は「急激に変わって行」き、「社会科学研究会」と名称が改められた。少数精鋭となり、「高杉教授はとうとう出て来なかった」。一方、「小樽の港一帯にビラ貼りをし」、演説会も開催し、「その効果があった」。高商の「政治研究会」が万事の肝入をして、「小樽の労働組合結成の第一回準備会」が開かれた。

多喜二は「転形期の人々」のなかで、二四年中の小樽における「転形期」への助走をこのように叙述する。どこまでがフィクションであるか否か判断は難しいが、時間的な錯誤があるものの、おおよその流れは実際に即したものではなかったろうか。前述したように、『本道ニ於ケル左翼労働運動沿革史』は、「本道ニ於ケル労働情勢視察ノ為メ松岡二十世、稲村順三等来道」を契機として、「労働団体ノ急務ナルヲ痛感シ寄々其ノ計画中」であった坂本佐一郎・菊池米吉・清水清らが、「仲仕人夫鉄工職工其他自由労働者等ヲ合算シ組合総員六六三名ノ豪勢」を擁する小樽総労働組合の結成に至ったと記録する。やはり『沿革史』によれば、政治研究会小樽支部の結成メンバーに黒田力造と斉藤磯吉という高商学生が加わっていたという。多喜二は、寺田行雄らからこの間の経緯を聞き取っていたと思われる。ついで、軍教事件の場面が次のように描写される。

次の年の秋、——年中行事の「発火演習」の時だった。

三百人位の学生は、霜崩れのしたダンダラ畑を一斉に駆け上がっていた。その時、軍事教練の教官から（それは陸軍少佐だった）「前方約一千米の箇所に、不逞鮮人が現われ、市街に火を放ち、盛んに暴行しつゝあり……云々」の指令がでた。——皆は馳せ上りながら、カチャカチャとせわしい音をたてながら、コウカンを開けて、装填をしていたが、その指令を聞くと、急に五六人が立ち止まってしまった。

「おい、一寸待ってくれ！ 不逞鮮人だって！？」

「そうだよ！ そうだよ！」

「人道上の問題だ！」

普段から軍教に反対だったものが、台尻を地べたに突っ立てた。

佐々木たちはいきなり大声で叫んだ。

「おーい、こんな侮蔑的な指令で動くのは、我々学生の恥だ！ やめるんだ！ やめるんだ！」

すでにみたように、これは実際の軍教事件惹起の経緯とかなり異なる。何よりもここでは「不逞鮮人」暴動の想定に、その場で社研メンバーの佐々木たちが反応し、抗議したという設定になっているが、実際の野外演習はハイキン

グ気分で終わり、社研メンバーの誰も反応せず、その夜、境一雄の指摘によって「想定」の問題性に気づいたのが真相であった。軍教事件の渦中の外にいた多喜二がその具体的な経過を十分に知らなかったということも考えられるが、おそらく事件収束後、寺田行雄らを通じて惹起時の状況やその後の展開について聞き取っていた可能性が高い。

とすれば、なぜ多喜二はこのようなフィクションとしたのか。推測の域を出ないが、前述のように高商「政治研究会」が「社会科学研究会」へ質的な転換を果し、「テキパキと実際に動き出すようになっていた」ことを（それにはかなりフィクションが含まれる）、この「発火演習」時の即座の抗議運動として、あるべき理想形で描き出そうとしたのではないか。「小樽の街の輝かしい左翼の伝統」の発端にこそ、軍教事件における社研の活躍が置かれることが望ましかった。

したがって、この「軍教反対運動」の結末は「佐々木たちの勝利とな」り、「学校当局は全社会に陳謝して「不逞鮮人」云々の文句を取消した」とされる。これも実際には社研側の「敗北」であり、「不逞鮮人」についてのみ学校側は口頭で遺憾の意を表明するにとどまった。そのような点において多喜二のフィクションが多く含まれているとはいえ、軍教反対運動の本質はしっかりと押えられていた、といえる。すなわち、「学内の問題を最も積極的に労働組合が取り上げて闘争した唯一の場合」であり、そこから「労働組合と学連の活動を、文字通り「実践の過程」に於て、交互作用的に強めた結果となった」という認識である。ここで、多喜二は軍教事件後の数年間を眺め渡して、「労働組合と学連」の共闘の例外的な事例として、小樽高商軍教事件を捉えている。「転形期の人々」とほぼ同時に発表された「故郷の顔」でも、「殊にこれが朝鮮労働者をその影響下にもつてゐる労働組合と連絡をとつて、小樽高商の学生社会科学研究会が活躍した」と書くように、労働組合と社研の連絡に注目している。

ほかに次のような点も注目される。一つは、軍教反対運動における朝鮮人労働者への視点である。多喜二は、組合の旗塚に「朝鮮の労働者を組合に獲得することは、この街としては急務なんだ、ところが、どうしても日本の労働者と反目してる。——これこそ良い機会だ！」と語らせている。この視点をもつことにより、「転形期の人々」のなかに、「李」や「陽」という朝鮮人を配置し、「日本の労働者も困るし、何時までも安い賃金で馬小屋よりもモット汚いところに住んでいる朝鮮の労働者も困るんだ」という問題を提示することができた。「故郷の顔」でも、日本人労働者と朝鮮人労働者の連帯に言及する。

もう一つは、高商の社会科学研究会の「モウ一度方向転換」である。その契機となったのが、「軍事教練」に反対して社研がストライキを敢行しようとした際、「就職の問題をま近かに控えている高商の学生は、案外考えていたようには動かなかった」という現実直面することで、かえって社研のメンバーが「殖えて行った」ことであり、それに加え、応援にやってきた「帝大の学生によって、佐々木たちの研究会が質的に躍進した」ことである。後者は、「顔の大きさの割りに眼の小さい、頭をグルグル刈りにした」と描かれる林房雄を指定した学生の、「我々学生は何時でも労働者の先頭に立ち、それを指導していかねばならないのだ」という指導にもとづく。こうして、社研は「組合に対する理論上の指導的な場所でないといけないし、そうなるように努力しなければならない」という「方向転換」を遂げたと、多喜二は描き出すのである。このあたりも寺田らから聞き取り、また多喜二自身においても見聞するところだっただろう。

軍教反対運動後の「社会科学の研究の方へ、学生たちを馳り立てた」状況も叙述される。「丁度そんな時、小樽の労働組合の向背——総同盟に所属しようか、評議会に所属しようかということが問題」になったとき、「評議会から山元謙三がやって」きた。これは実際には軍教事件直前の二五年一〇月初旬のことだが、多喜二は事件後として描く。ここで多喜二は「故郷の顔」で紹介した山本懸蔵に関する「面白い話」を、「転形期の人々」に転用する。社会運動にたずさわるとき、「拷問はつきもの」であり、「ハッキリした覚悟を持つことが必要である」ことを強調した結果、「メンバーは減ったが、皆の心構が何処か異ってきた」というエピソードである。

「故郷の顔」で取り上げられたもう一つの山懸にまつわる話——総同盟か、評議会かの所属をめぐる問題が争われた立会演説会で、「山謙」の巧みな戦術が的中したこと、その後、「旗塚たちと一緒に小樽の街を駆けずり廻った」こと——も、「転形期の人々」のなかに重要なエピソードとして組込まれる。そして「序篇」は、「小樽の労働者のなかに、旗塚の所謂「輝やかしき伝統」の根が、こうして植えつけられた」として、「今、新しい「政党組織」の前に立っている……。」と結ばれる。この「輝やかしき伝統」は、「故郷の顔」でもそのまま用いられていた。多喜二にとって、「最も小樽の顔」にふさわしいのは「小樽の労働組合の向背」をめぐる闘争で植えつけられた「輝かしい左翼の伝統」であった。

「転形期の人々」が小樽高商軍教事件の前後から造形されていることは、多喜二の社会主義者としての自覚に至る、紆余曲折といってよい長い「内的進展」の出発点がそこにあったことを意味している。しかも多喜二は、自らが「小樽の街の輝かしい左翼の伝統」の一端に連なり、「転形期の人々」のなかの一員であることを誇りをもって自覚している。